明治三十七年十一月二十三日發行
（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百八拾號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衞生雜誌

第百八拾號 目次

●十二月納會

來十二月三日(第一土曜日)午後正一時半より晴雨に拘はらず本年の納會を神田區一ツ橋通女子職業學校內に於て相開され左記の通講演有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會有之度候此段御案內申上候也

追而開會時間厲行●衣服は勤めて御質素に相願候

演題未定

陸軍步兵中佐　堀內文次郎君

醫學博士　遠山椿吉君

仝

明治三十七年十一月

私立大日本婦人衛生會

會員諸姉に告ぐ

日露兩國の交 砲火を以て相酬ゆるに至りてよりはやも十月あまりとはなりぬ。國運めでたくして戰はつねに我に利あれども其前途は尙はるかに遠し國をこぞつて共に力を致さむこと國民たるものゝつとめなれば國の爲め親をすて妻子をすてゝ進んで難にあたれる同胞の上を深く思ひやりて自らの力の及ぶかぎりはこれ等の人々の爲めに盡さむことはまた多く言葉を要せざる處なり然りながら世界に數多からぬ强大國を敵として戰ふことにしあれば一と度戰ふ毎に我同胞の傷き斃るゝものゝ甚だしきは萬を以て數ふるに至らんこれが爲め本國に送らるゝ傷病者がいたてになやみて呻吟するさまのいかばかりかなさけなかるべき本會もかねてこれ等の人々の爲め慰の一品たりとも送らばやと思ひ居たる折柄近頃日本赤十字社にては病者に尤も必要なる帽子の夥しく不足せるよしを聞きければ是を寄送することは誠に本會の相等しき事業と思ひ早速臨時會を開きて評議すべかりしも至急を要するの際已むなく役員會議にて種々評議の末本會基本金中より金貳百圓を出して同社へ寄附したり然りながら尙戰况の進むと共に傷病者も益〻增加することなればこれ誠に九牛の一毛にも若かさるを覺ゆればひろくこれを會員諸姉にはかり一個たりとも多くこれが不足を補はむと欲してゝに左の定めを設く希くは諸姉幸ひに多少の同情をよせられむ事を（つゞく）

一、本會の傷病者に對する帽子寄送は日本赤十字社本部とす

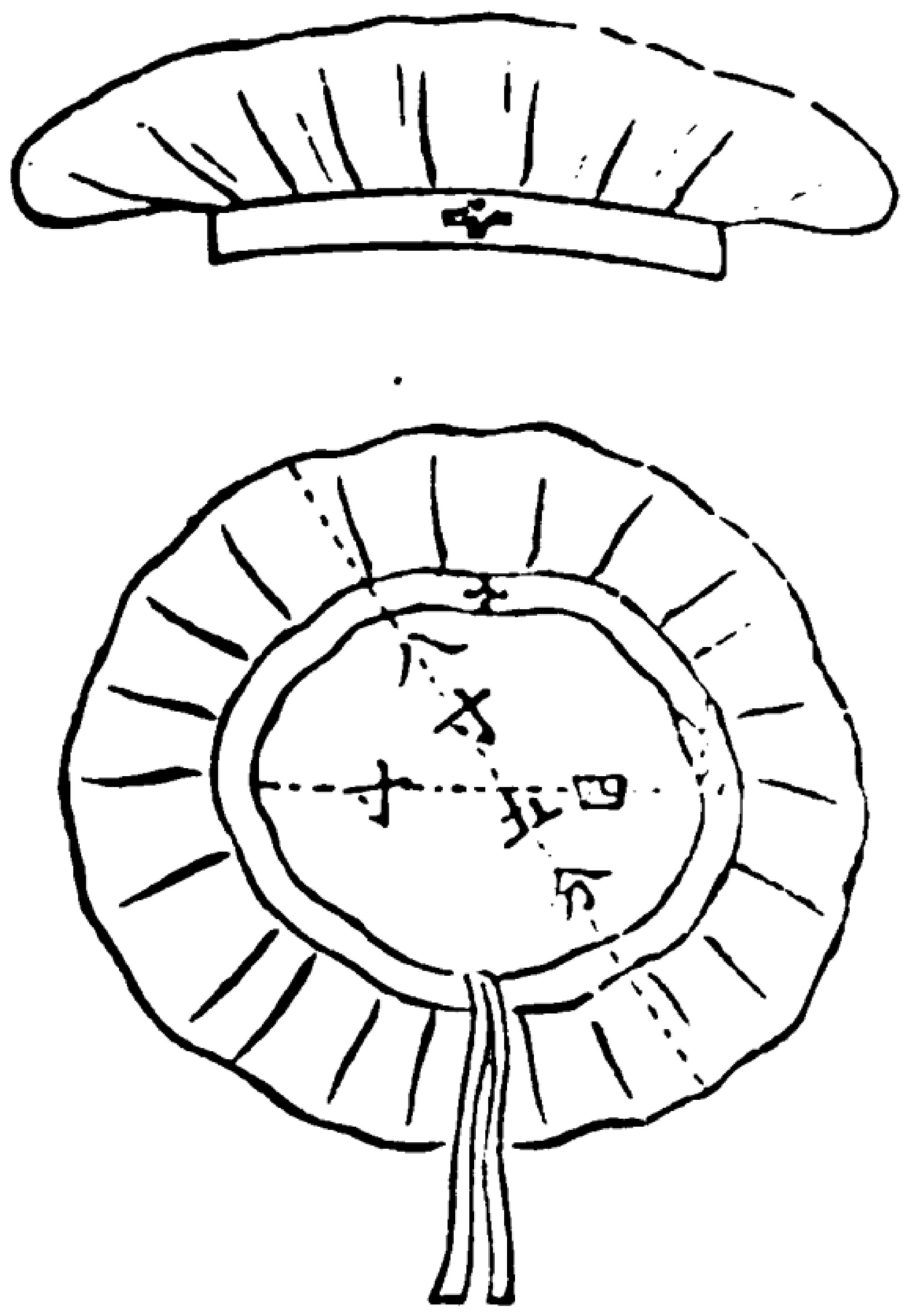
二、寄贈者は（現品、現金、）何れとも御随意本會事務所（麹町區飯田町六町目三番地）迄御差出しあれば本會は直ちに之を取纏めて寄贈の運びをなす

三、寄贈の金品に對しては本會事務所より受領證を交附すべきも赤十字社よりの受領證は一と纏めにしたるものなれば一々交附せず

四、本會は戰爭終局まで此事業を繼續し何時にても多少に拘はらず其取扱を快諾す

五、寄送者諸姉の人名其他右に關する要用の件は本會雜誌を以て報告す

六、寄送の帽子は左の雛形により調製の事



調製代價は本フランネル綿フランネルの別により多少の相違はあれども凡廿錢以上卅五錢位なり

明治三十七年十一月

大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならすや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつばら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々を招請して衛生上諸般の講義演說談話を聽き互に相研究し尚之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敘べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふくことゝしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則

（明治廿二年十二月改正）

●第一章　目的　第一條・本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二章　名稱位置　第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三章　會員　第三條　本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得　第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續は末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ケ月金三拾錢以上、通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せす●第四章　役員　第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選舉し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす第十三條　會長の見込を以て役員外特に會員中より臨時指名委員を設くることあるべし第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ケ年とす滿期再選することを得若し任期中缺位を生ずるときは次點者を以て補缺す第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第五章　集會　第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす總會は三月之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし評議員會は時々開會須要の事項を評議するものとす第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして隨意臨講せしむるものとす第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を陪聽せしむるを得（但衣服は總て質素たるべきこと）第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁す但贊成員若くは會員に緣故ある男子は此限にあらす第二十條　規則の改正を要し又は重要の事件あるときは總會に於て議定するものとし議定は總て多數決とし可否同數なるときは議長之を決するものとす第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第六章　會計　第廿二條　本會の所有金は本會々員の名義を以て三井銀行に預くるものとす但些少の金額に限り日用支出の爲め[illegible]收支は總て會計擔任[illegible]一ケ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし●第七章　支會　第廿四條　地方に於て本會々員十名以上の發起者あるときは本會の承認を受け支會を設立することを得支會は私立大日本婦人衛生會某支會と稱し其規則は本會の規則と抵觸せさる樣記載すべし第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得第廿八條　支會に加入したる本會々員に配付すべき本會の雜誌は支會に回送すへきを以て其實費を支會より本會に送付すべし　支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし●第八章　雜件　第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し毎會に於ける衛生上講義演說談話等の筆記及内外要報本會の諸報告等を掲け之を會員に配付すべし支會の報告あるとき又同じ第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を簿冊に登錄し尚

本會雜誌を以て報告すべし第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一錢増）第卅三條　會費は東京府下に限り每月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麹町飯田橋通宛）振出しあるべし第卅四條　會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは忠告することあるべし第卅五條　本規則は會長の意見又は會員二十名以上の賛成に依り總會の決議を經るに非ざれば之を更正することを得ず

事務所　東京市麹町區飯田町六丁目三番地

私立大日本婦人衞生會

●役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃　周子殿下

會長　侯爵鍋島夫人　榮子

副會長　濱尾作子

（いろは順）

幹事　畑山春子

仝　羽田三紀子

仝　岡田德子

仝　高木かう子

仝　山本多穂子

仝　松平芳子

仝　三浦教子

評議員　伊集院しけ子

仝　石川貞子

仝　濱田捨子

仝　仁禮薛代子

仝　四[illegible]升子

仝　穂積歌子

仝　緒方俊子

仝　岡山とし子

仝　男爵夫人　加藤鈴子

仝　片山色子

仝　子爵夫人　田中いよ子

仝　丹波貞子

仝　高橋孝子

仝　田村きよ子

仝　相馬隆子

仝　男爵夫人　南部展子

仝　中濱芳子

仝　伯爵夫人　松平光子

仝　子爵夫人　松井正子

仝　子爵夫人　松平久子

仝　木場小ゆり子

仝　片[illegible]逕子

仝　三宅藤子

仝　宮本樂子

仝　宮下咲子

●支會　千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

（●は本會及支會に於て講演せられし諸氏）

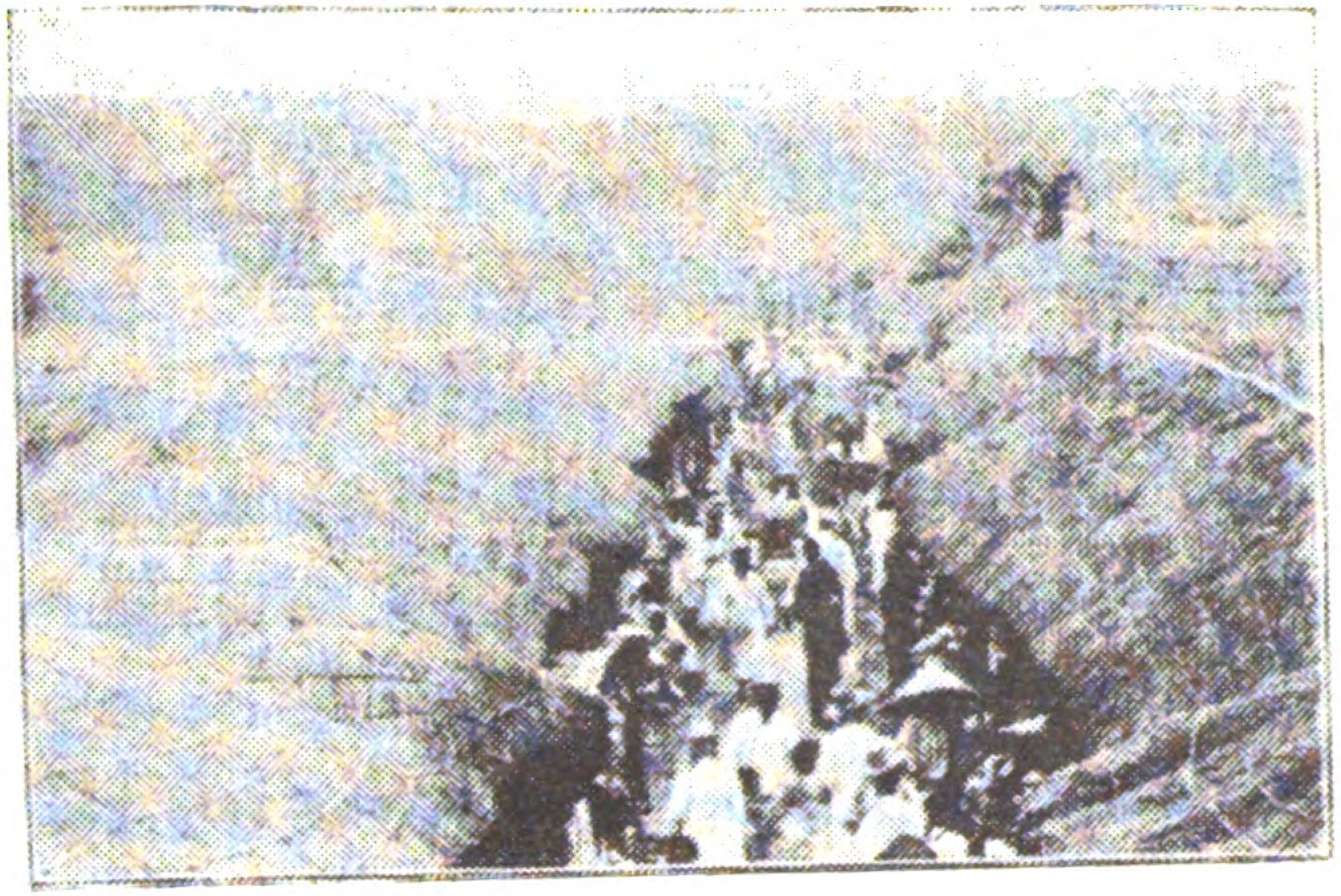
醫學博士　●入澤達吉君
理學博士　●飯島魁君
ドクトル　●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學士　●伊東祐彦君
ドクトル　●飯盛挺造君
醫學博士　●伊藤隼三君
理學博士　●石川千代松君
赤十字社病院内科　●岩井禎道君
醫學士　●石原久君
貴族院議員　濱尾新君
醫學博士　●濱山[illegible]進君
法學博士　●[illegible]大君
東京　秦[illegible]四郎君
醫學博士　●芳賀榮二郎君
衞生局長　●長谷川泰君
新潟　●長谷川一[illegible]君
小兒科　小原賴之君
醫學士　●林春雄君
醫學士　●佐藤達次郎君
醫學博士　●緒方正規君

歩兵中佐　●堀内文次郎君
醫學博士　●土肥慶藏君
醫學博士　●岡田和一郎君
醫學博士　●大澤謙二君
醫學士　大西秀治君
醫學博士　●大澤岳太郎君
一等藥劑官　●恩田重信君
醫學士　若杉喜三郎君
男爵　●加藤弘之君
ドクトル　●加藤照麿君
醫學士　●賀古鶴所君
醫學博士　●河本重次郎君
醫學博士　●片山國嘉君
醫學士　●川上元治郎君
醫學博士　●金杉英五郎君
醫學士　●淺原光與君
醫學博士　●高橋順太郎君
ドクトル　●高山紀齋君
醫學博士　●高木兼寛君
法學博士　高木賢三君
醫學博士　●田代義德君
新潟　●田代亮助君
男爵　高崎正風君
醫學士　竹中成憲君
醫學士　●高田耕安君
[illegible]　●高橋辰五郎君
藥學博士　●丹波敬三君
醫學士　高橋貞碩君
藥學博士　●田原良純君
醫學士　●田村光亮君
醫學士　●久保猪之吉君
醫學士　米山彦郎君
三等軍醫正　●星野篠光君
醫學士　●宮本叔君
一等軍醫　●櫻井忠恕君

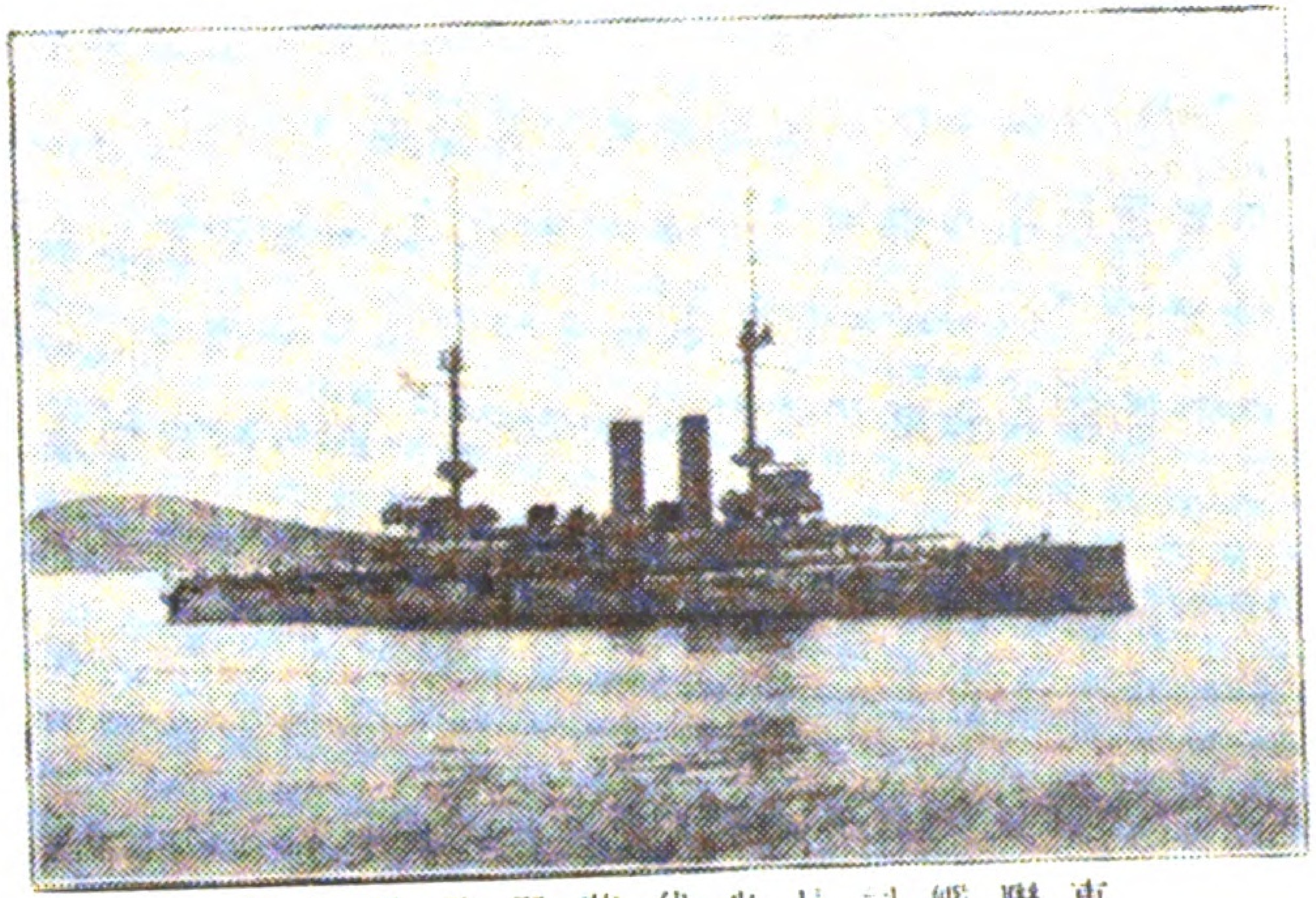
大日本教育會長　辻新次君
理學博士　●坪井正五郎君
醫學博士　●長與稱吉君
男爵　南部[illegible]男君
藥學博士　●長井長義君
醫學博士　●中濱東一郎君
醫學士　●栗本庸勝君
海軍中佐　小笠原長生君
醫學士　●村松[illegible]三君
醫學博士　隈川宗雄君
醫學博士　●栗本東明君
醫學士　●山田鐵三君
醫學士　●山田弘倫君
醫學士　●山根正次君
醫學士　●山川春二君
醫學士　丸茂文良君
[illegible]　●丸山良四郎君
ドクトル　●松山陽太郎君
ドクトル　●小此木信六郎君
盲啞學校長　●小西信八君
廣島　小泉[illegible]君
醫學士　●古川榮君
東京　布施[illegible]君
[illegible]　●後藤新平君
[illegible]　●エ、ベルツ君
醫學士　●甲野棐君
文部書記官　●吉田乃吉君
子爵　●秋元興朝君
前軍醫總監　足立寛君
ドクトル　●新井吉方君
ドクトル　●富士川游君
高崎醫會長　七谷全次君
帝國婦人科　●水原格君
ドクトル　●久保田誠啓君

醫學博士　●佐々木政吉君
醫學士　●淺田[illegible]決君
醫學博士　●朝倉文三君
ドクトル　●朝山義六君
高崎　秋田聰太郎君
醫學博士　●佐藤三吉君
醫學士　櫻井郁二郎君
醫學士　●佐藤恒久君
ドクトル　●佐伯理一郎君
醫學博士　●榊順次郎君
醫學士　●榊保三郎君
醫學士　●櫻井恒次郎君
醫學博士　●桐淵說次君
醫學士　●北村精造君
ドクトル　●北川乙二郎君
醫學博士　●木下正中君
醫學士　●北島小太郎君
醫學博士　●北里柴三郎君
醫學博士　●三浦守治君
醫學博士　●三浦謙之助君
小兒科專門　●宮本仲君
理學博士　●[illegible]作作吉君
醫學博士　●三島通良君
醫學博士　●三宅秀君
醫學博士　●三輪信太郎君
伯爵　●土方久元君
醫學士　●島村俊一君
醫學博士　●弘田長君
ドクトル　●須田卓樹君
ミス[illegible]コース
醫學博士　●森林太郎君
醫學士　●笹川三男三君
醫學士　●波多野傳君
醫學博士　●矢[illegible]秀三君
醫學士　簗瀬雄一君

朝鮮風俗一、



帝國軍艦三笠

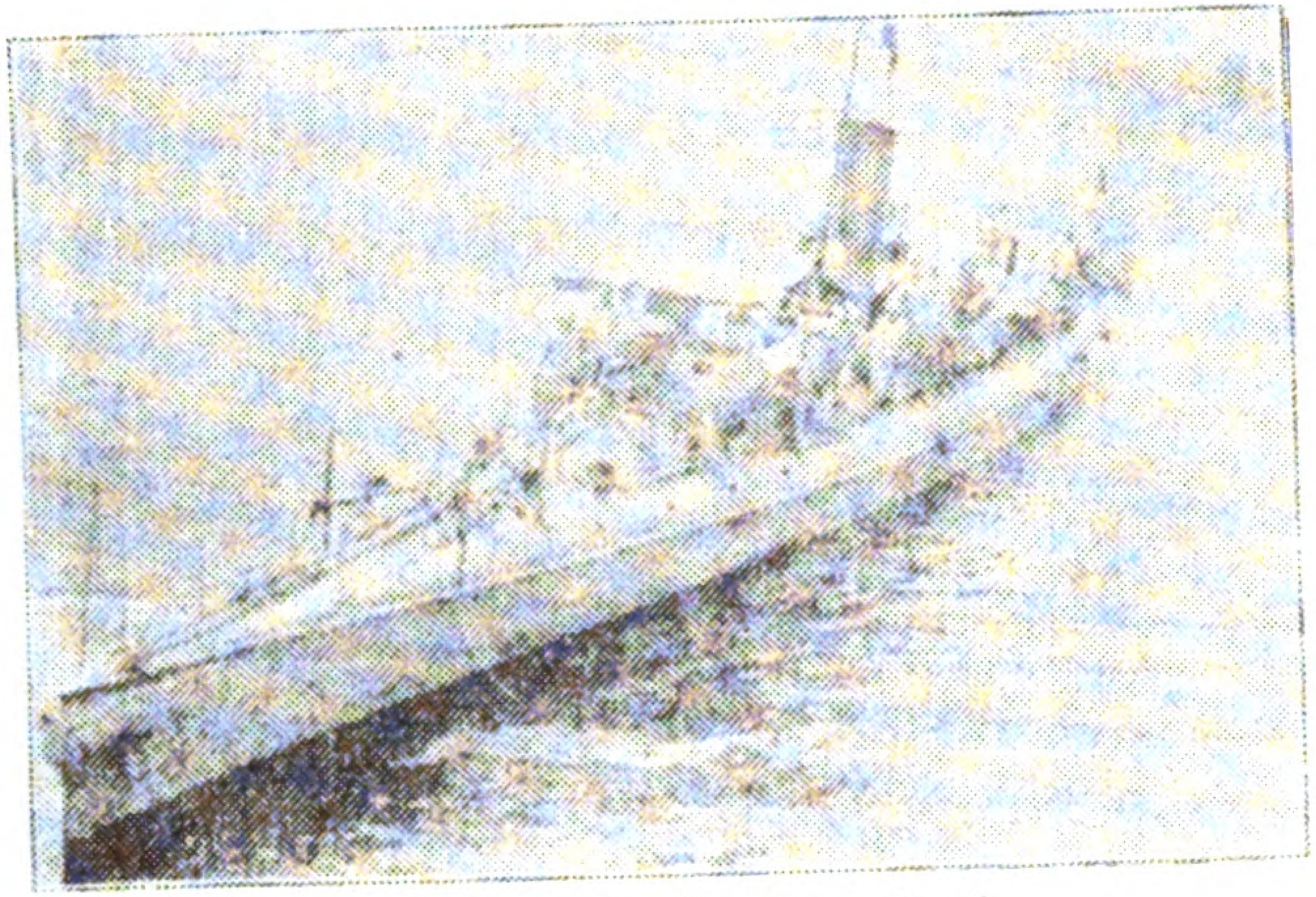


東郷聯合艦隊司令長官坐乘
伏見若宮殿下分隊長として乘組

朝鮮風俗二、



帝國水雷艇



長山列島附近に於ける

婦人衛生雜誌第百八拾號
（明治三十七年十一月二十三日發行）

名家演壇

滿洲丸に於ける觀戰談（明治三十七年十月例會）

醫學士 山根正次君演說
佃速記事務所員速記

私は唯今御紹介になりました所の山根正次でござります、先般私が滿洲丸にて出發しやうと致す際に、丁度濱尾さんが御出になりまして、何か演說をして呉れと云ふ御注文でござりましたが、其際には出發前のことでござりました故、御希望を充たすことが出來なかつたのでござります、然るに今回歸りましたに就ては、前にも約束があるから、取敢へず滿洲丸に於ける觀戰談でもやつて呉れないかと云ふ御注文でございまする、爰に於て喜んで一場のお話をすると云ふことを御約束を致しました、然るに滿洲丸に於ける觀戰談と云ふものは、既に各種の新聞に掲げられ、又私の屢々演說致した所のものでありまして、或は重複する嫌もありませうけれども、兎に角そのお話を致さうと思ふのでござります、其中に於て、殊に衛生に關係する所の狀況も多々ありますけれども、其ればかりをお話いたしましたのでは、興味が或は少ないかも知れませぬから、私は今日は少し外の事も混ぜてお話を致さうと思ひます、併し滿洲丸に於て見た所の事は、悉くこれを話し得られるものでない、事政治に關係致すこともあります、軍事に關係致すこともあります、又斯う云ふ御會合に對して話すべきでない事柄もありまする、故に此の御會に於て話し得るだけの所を、概略お話致さうと思ひまする。

此のお話をするには、なか〳〵時間が長く掛かります、唯今「オステオパシー」のお話がありまして、血液が澁滯をすると病氣が起ると云ふやうなお話を

伺ひましたが、餘り長い話を聞いて御居になると血液が渋滞をして、「オステオパシー」の御厄介になるかも知れませぬ、故に其れに御罹りにならないやうに、たまには身體をお動かしになつても宜しうございます、或はお笑ひにならうとも、或はお泣きにならうとも、それ等は御随意でございます、そこで私が之れを本氣で話しますれば、兎にも角にも四十日以上の間に見て來たことをお話するのでありまする故に、今晩の十二時位までは掛かるかも知れませぬ、それでは随分御迷惑でありませうから、縮めに縮めて五時間位、それでも多いならば二時間で御免を蒙らうと思ひます。

それで今般丁度私も議員の一人でありまして、征露の軍隊を慰問をせんが爲に、乃ち滿洲丸に乘りまして、韓國及海軍の根據地の方に參つたのでありまする、則ち横須賀より、黄海の我聯合艦隊根據地に至る間、往復四十餘日を費せる旅でありまして、此の間に實見いたした事をお話するのであります、且又日記の通りに、ズーッと讀立てると宜しうございますけれども、いろ〳〵拔いて話さなければならぬ事が多うございますから、話が前後整然を缺いて、皆さんを御滿足させることも出來なからうと思ひます。

本年の五月十五日に議院より、觀戰の通知に預りまして、十九日に於きましては、衆議院書記官長よりの通牒によりまして、同行者一同は議長官舍に集りました、さうして必要なる所の主旨を受けまして、二十三日に出發と云ふことになつて居りましたが、都合あつて段々と延びまして、六月十二日に愈々新橋より横須賀の地に入りました、さうして午前十時に滿洲丸に乘りました、之れが旅行の首です、それから其日の十二時、まだ船が出ない時に、一同が食卓に就きました、御馳走の話から初めます、て、此時には財部中佐と云ふ人が、海軍から行く上席でありまして、山口少佐が總ての船に就ての權力を有つて居る人であります、それに小笠原少佐（今日の中佐）が一緒に行かれました、それで財部中佐は上席

てありまする故、大臣及伊東軍令部長等が首途を祝さるゝことを述べられて、三鞭酒を拔いて、澤山の人に盃を擧げさせ、而して天皇陛下の萬歲を三唱しました、殊に其處の鎭守府長官たる井上大將も來つて送られました。そこで六月十二日の午後二時に横須賀を發しましたが、食卓に着いて居る時分からして、海軍の樂隊が滿洲丸の縁に居つて、始終樂を奏して居りました、また出發をする際にあつては、十數里の外にまで、小船が樂を奏して送つて呉れました、出る時には中々愉快でありました。

それから相模灘に船が進んで行きますと、さうすると電信の通知がありました、それは何であるかと云ふと、海軍大臣からして、無事の航海を祈る。本出氏が又便乘すると云ふことを言つて來た、是は何に依て來たかと云ふと、所謂無線電信で言つて來た。則ち大島の二里ほど横の處で其電信を受取つたのであります、私は生れてから初めて無線電信の通信に接して、實に是は有難いものであると云ふことを感じたのであります、それから中々船が搖れます、雨が降ります、併し私共は屢々亞米利加航路、歐羅巴航路、或は印度洋などの酷い處を乘つたことがありまする故、左程には思ひませぬが、兎に角隨分搖れました、それから十三日の午後六時に神戸に着したのであります。

それから十四日の午前八時に神戸を發しまして、今度は内海であります、御存知の通りに四國と中國との間の海を航するのでありまして、殊に天氣が好い、尤も好い景色を見せる爲めに、どうか晝の御飯を早く食べて呉れと云ふので、十一時三十分頃に御飯に有付きました、私のやうな丈夫な者は何遍でも食べたいといふ方でありますから、いつでもお嫌ひはない、波が平かでありまして、皆食卓に着きました、前の日に引變へて御客が多い、船客の氣焔が高くして甲板に溢れるばかりであつた、併し船客の氣焔と云ふものは、波と反比例でありました、波が高いと氣焔が低い、波が靜かになると甲板の氣焔が非

常に高いのであります、實に是は奇でありました。併し此日は好い天氣でありまして、外國人も大變喜んで通りました、それから新聞上でも御覽になりましたらうが、此時に旅順陷落の投票があつたのでござります、所で私は七月二十一日を以て旅順陷落とやつた、併し夫れは落ちる積りぢやない、何故かと云ふと私は聞いたことがある、出る時に山縣さんに御暇乞に行きましたら、まだ二箇月や三箇月では旅順は落ちないと言はれた、案の如く今日までも落ちませぬが、大將の言の如くであります、自分は一番仕舞の積りで其話をした、さうすると未だ投票しない人が一人あつて、私の隣の日即ち二十二日として入れた人がありました、午後に、旅順港の第六艦隊が戰爭に勝つたと云ふことの報知がありました、之れも無線電信で參つたのであります。

爰で些と衞生に關係する話があります、船内に、私が次に申しまする如き掲示が出た、それは何であるかと云ふと。

一　滿洲地方に天然痘流行に付、種痘希望の各員は、軍醫官に申出づべし
二　指定上陸地と雖も流行病甚だしき時は上陸を停止し、若くは上陸の宿泊を停止すること有る可し
三　各員が陸上に於て購買する物品にして衞生上危害ありと認むるものは、船内に携帶を謝絕することあるべし
四　滿韓の地は概して不健康にして、赤痢腸窒扶斯發生候に付、上陸中は殊に飮食物に注意相成度事
五　前事項の外臨時必要の件は、軍醫官より時々陳述することと有る可し

斯樣な達が船内に掲げてありました、で、本船には矢部軍醫中監が居つて、衞生上の取締に任ぜられて居り、それから看護長が一人あつて、之れが調劑を掌つて居りました、而して船中は如何であるかと云ふと、滿洲丸は中々澤山の金がかゝつた船でござ

いまして、「トリエースト」に於て出來たもので、露西亞の分捕船でありますが、誠に清潔で、浴室其他が整頓して居る所は遺憾がない、それから十四日の午後に、船は厳島に達しまして小蒸汽船によつて上陸を致しました、少しでも船に居るとモウ上陸がしたくなる、上がつて見やうと云ふので、紅葉の茶屋と云ふのに一泊しました、所が宿屋の寝具に白襟が用ゐてない、私は曾て、蒲團の襟は白襟でなければならぬと云ふことを申したが、今日は内務省令となつて、宿屋では必ず白襟を用ゐなければならぬと云ふことになつて居るにも拘らず、其白襟が用ゐてない、矢張り例の天鵞絨が掛かつて居る、地方の衛生警察の不行屆なることを察するに足るのであります、此の夜は黒田侯爵及鍋島從四位殿から、厳島神社に献燈をせられた、即ち燈籠を點けることを寄附された、船から見ると非常に立派でありました、數百の燈籠が海面に映じて非常に立派でありました。十五日の午前に大本營から、則ち東郷長官の電報が達せられた、七時四十分に宮島を發して、今度は呉に上陸しました、さうして其呉の工場を觀たのであります、この工場を觀に参つた時に出迎へられたのは、則ち山内造兵長で、是は私が墺國や佛蘭西等で一緒になつたことがあつて、能く存じて居る御方であります、其ほか鎮守府の参謀長が出られて吾々を迎へられたのであります、この呉の工場と云ふのは世界有數の工場であります、殊に今回觀に参つた者は一驚をさしたのは何であるかと云ふと、それは大きな大砲を造ることとであります、御承知の通り三十珊の大砲と云ふものは、なか〳〵日本では出來ぬと今まで思つて居つた、日本人も然う思つて居つたが、外國人も矢張り然う思つて居つたに違ひない、所がそれが出來るのです、其大砲のお尻の所は、四人も五人もして初めて廻る位、長さは七八間もありましたが、其大砲をば、鐵を溶かして鑄る所を見せましたが、一同驚いて居つたやうであります、それから殊に其大砲の彈丸——三十珊の彈丸は私共の胸ま

てもあります、周邊が私共よりは些と大きい、それが頻りに出來て居る、恰も飴細工の如くで澤山彈丸が陳列してあつた、西洋人は吃驚して居つた、速射などに用ゐる彈丸は山の如くに積んであつて是は何程打つても大丈夫、此方から送出すことは出來ると云ふことを外國人に見せたのであります。

外國人曰く是れは何でも外國から注文が來るのであらう、今度の戰爭ぢや此樣なに日本では彈丸は要りますまいと言つたさうです、それから工場衞生に付きましてはナカ／＼屆いて居ります、殊に此の工場に於て病人が出來た際にはどうする、怪我をしたときにはどうすると云ふやうな順序が悉く備つて居ります、これは肝心であります、澤山寄附もありますし自分等も積立てるやうにもなつて居るから即ち共濟會なるものがあります加之私共が皆さんに殊に此工場に付て御話しなければならないのは晝夜非常に能く働いて居るのであります、デさう云ふものを見て私共は今度は水雷發射場に行つた、水雷發射場に於て私共は何を見たかと云ふと、水雷を發射する模樣を見せられた、其處に於て一の寫眞を寫したのがあります、軍事畫報や何かに出て居りますから、御存知でありませうけれども、後で御廻しを致しますから御覽を願ひたい（寫眞を示す）これが水雷發射場であります、これは陸の方から見た所でありまして、私共が此中に立派な顏を寫して居ります、此發射場から水雷二發發つた、初めは二千五百米突の距離、第二は千五百米突の距離を發つたのを見たのであります。兩度共的中しました夫から晩に柴山鎭守府長官の案内に預り御馳走になりました。

十六日の午前に吳港の病院を問ひました、此吳港の病院には水兵の怪我をした者が居りまする、さう云ふものを吾々は訪ひに參りました、デ黑田侯爵には貴族院を代表し、田口博士は衆議院を代表して負傷者及び病者に向つて慰問をされましたが、患者の中に篠原鈴木と云ふ二人の重傷者が居つた、介我將軍が云ふには、是れは怪我が大きいから大勢で行くと

病人に障るから二人で行ふと云ふので、私共が付我將校と二人連れて慰問に參つた、然るに此二人の傷は一人は破裂丸が手に命中つて居り、一人は肩胛骨に命中つて骨を砕いて居ります、これが吾々の慰問に對して涙を流して喜んだのであります、デ此病院は至つて清潔でありました、患者が二百五十名程あつて職員は八人でありまして候補生が二人、職員は軍醫が八人で、それから藥劑官が三人、看護手が九人、看護と稱へる者が十七人、雇看護人が二十九人でありまして、平時の收容定員は二百八十人でありますけれども、今日は戰時でありますから五百人を收容することが出來るやうに準備が出來て居りました、此病院を見て今度は九時に滿洲丸で吳港を發して十時三十分に江田島へ行きました、江田島は即ち兵學校のある所で、兵學校に行くには軍人は皆正服を着けて立派にして上陸るのであります、それは宮樣もあらせられるし、殊に學校に於ては規則正しいことを見せなければならぬからであります、吾々もフロックコートを着て、さうして楠木鉢のやうなものを冠つて上陸を致しました、デ本校に行くと校長は私が佛蘭西で一緒に居つた所の富岡少將でありました、それから教場を示めされたがナカ〳〵清潔であります、又兵學校の生徒はナカ〳〵勉強をして居ります、それで兵學校に於ては實地に付てものを教へるのはナカ〳〵盛んであります、船の形、或は綱を綯ふ事でも鎖のことでも、何でも實地に付てものを教るやうにしてあります、其外擊劍或は柔術、色々な事があります、其時に有栖川若宮殿下に拜謁を賜はりました、それから本校の生徒は何程居るかと云ふと、五百七十一人であります、年々二百人の生徒を出して居ります、財部中佐が、なんぼ戰爭で死んでも此處から製造すると言つて居つた、其中には常に五六人のトラホームが絶えずあると云ふことであります、それから一日僅か十八錢の賄であるに拘はらずナカ〳〵生徒は立派な養ひをして身體も非常に壯健であります、これは海風が身を養ふに足るであ

りませう、さうして能く勉強して居ります、デヽて御話をしなければならぬのは陸戰の模樣を遣つた、海軍の兵が陸戰をする際に大砲を持つて上陸所をやりましたが非常に能く揃ひました、殊に又三十珊とか速射砲とか色々ありますが、生徒に號令をかけて本統の彈丸を擊つ所から何から皆やつて見せたのであります、これは非常に勇壯でありまして、恰も實戰を觀るやうでありました、向ふ側には千八百米突の所に小蒸汽船が往復して居る、それを覗ふのであります、だから始終色々の向きにして大砲を擊つ所をやりましたそれから今度は棒倒しと云ふのがあつた、それは本校の五百十七人を二つに分け、即ち甲乙と分けまして、さうして其中に棒を持つて居る組と、突貫をする組がある、二百人ばかりで百人は棒を持つて居る、他の百人は先方に行く、此棒を持つて居る者が早く倒されたのが負けであります、是れは外國人がナカ〳〵驚いた、柔術をやつて折る引搔く血が出る、人の頭の上に上つて行つてゆさぶる、皆一生懸命でやつて居る、それが二回あつたが甲乙双方共一偏づヽの勝利がありました、外國人曰く此ればかりでも露西亞に勝てると申ました。

それから十六日の午後に拔錨をする前に一寸聞いたことがありますそれは江田島には西鄕小學校と云ふものがある、是は教員が廣島縣中で第一等であるさうで、又此處から出る生徒は拔群であるさうです、西鄕さんが港を拵へる上に於て功勞がある故に西鄕小學校と云ふものを拵へて其名を遺してあるのであります、それから宇品を經て又宮島に行きました、何故宮島に行つたかと云ふと、其時に聞えたのは沖の島に露艦が居つたと云ふ警報があつた、それ故に出て行くことが出來ないからであります。

それから十七日には私は船から上陸つて何でも山に登らう、山の上から鹽が出るからそれを見に行きました、こヽで少し可笑しいことがありますそれは皆健脚先生で威張つて居る、それから私も一緒に行きました、行中の外國人でも何でも負けるものか、所

がナカ〱嶮岨い、里程一里何程の山であります、それは四十何分かゝつて登りました、其時に或新聞に山根が一番後で登つたと云ふことが書いてありましたが、所が一番後ではない、私は平素衞生などを注意して十分運動をして居るからナカ〱達者の積りで登つた、登つたが何分にも嶮岨い、それでも一生懸命になつて登つた、其山に堂があつて、堂に鐘が吊げてあつたのです、ゴン〱撞いた、それで戻つたときに第一番に梵鐘を撞く者は山根正次と云ふことを書ました、所が大いに不平があつて我が先きだとか云ふやうなことから新聞に出した、兎に角登つたことは私が一番先きであつたのです、亞米利加人などはナカ〱舌を巻いたのであります、それから十二時に船に歸らんとした所が、號外があつた其號外は何であるかと云ふと即ち玄海洋に於ける凶變であります、實に驚きました、船に歸つて皆に告げたら皆驚いて、其號外を以て初めて知つたのであります、澤山に船の名があつてそれを沈められたと云ふやうなことがありました、それから俄かに出ることが出來ない玄海に向つて出ることが出來ませぬから直ちに三ツ濱に向ふことにあつたのです、是は松山の捕虜を見る積りで、さうして宮島を出て三ツヶ濱の方に向ふ途中央に向つて來る所の一つの船が在る、此れは土佐丸であります、土佐丸も沈んだと云ふやうに書いてありましたが、是は助けに行つて即ち澤山の兵隊を乘せて居つたのであります、吾々が帽を振り巾を振つて之を迎へた所が、先方の兵隊は皆直立して禮をして居りました、それから其日の午後の五時に三ツが濱に船が着した所が、前に電報が行つたことゝ見えて吾々の一行を知事或は警部長が船を連ねて迎ひに來ました、それなら上陸て其日に道後の溫泉に參りました。

それから十八日の午前四時半、朝一番に起きて溫泉に這入りました、浴後宿屋を出て旅團長に伺ひました、旅團長に引かれて附行社に行きました、デ捕虜收容院の小島少尉を知つて居りましたから周旋して

見せることに努められたのであります、一同此捕虜を見に參りました、或は病人を見ました、殊に外國人は怪我をして居る捕虜が如何なる取扱になつて居るかと云ふことを見たいと云ふやうな風で、外國人は悉く捕虜の居る所を廻はらなかつたのであります、負傷者は衛戍病院或は勸善堂と云ふ所に收容してあります、又捕虜の方は公會堂其他の寺院に入れてあります、それから如何にも捕虜が貧乏であるから何か遣つて呉れいと云ふことでありました、依て貴衆兩院の人々は莨を遣らうと云ふことになりました、さうすると通辯官が居て、其捕虜に向つて、貴衆兩院の人々がお前達を慰問に來たと云ふことを言はれると、一同立つて禮をする、殊に今回お前達が不自由であらうからと云ふので莨を下だされたと云ふことを通辯が言ふと一同號令がかゝつて返答する如く直ちに大きな聲を發する、其聲は何と聞ゆるかと云ふと「ボコリコブワゴダリウ」是は有難うと云ふことでございます、デ私は病院でも勸善堂に於ても病人の居る所を見ても如何にも手當が良い、赤十字の人々は能く盡されて居る、看護婦などは骨を折つて居るのが充分解ります、それから寺院などの捕虜はどうであるかと、云ふと一種言ふべからざる臭氣があつたと云ふのは、捕虜によつた時の衣服を來て居るのでありますから臭氣はナカ〱烈しい、それから私は赤十字社の中に彼の國の水兵が入れてあるのを見ました、是れは中立國から預かつたワリヤークの戰傷者であります、これはナカ〱立派なものであります、身體が非常に強壯なるものであります、先日の戰爭の時にも海軍の水兵が怪我をして居つた者の衛生は大變良いと見えてナカ〱立派であると云ふてありましたが、又ワリヤークの水兵の負傷者も大變立派であります、清潔で殊に健康であります、尤も是は中立國から預けられてあるので殊に叮嚀にしてある、捕虜でありませぬから……其中に三名足を切つたのがありましたが、有難いことには悉く皇后陛下の御下賜の義足を付けると云ふこと

になりまして、其時に有難がつて居りました、貴衆兩院者共よりも之に賞を送つたから大變に禮を言つて前の「ポコリコプワゴダリウ」を申ました、それから其時に私共が松山を歸らんとするときに知事以下の人々が皆送つて來てナカ〳〵鄭重でありましたが、爰で皆さんに言つて置きたいことがあります、それは何んであるかと云ふと、此松山の各高等官の御夫人方知事の夫人或は旅團長の夫人を始め殆ど毎日詰切てあります、詰切りで此赤十字社事業に盡力して居られます、捕虜なども殊の外其親切を悦んで居ると云ふことを承つて居ります、其狀を見て實に熱心なもるであると云ふことを吾々は感服致しました、此事は殊に皆さんに言つて置きます。

六月十九日には其船が出て今度は門司の方に着いて馬關海峽の方に行つた、門司に行つたのは何の爲であるかと言ふと、彼の東郷長官に何か持つて行きたい夏橙が宜いと云ふことを聞いたから、そこへ船を寄せて貰つて態々請取つたのであります、其時福岡縣の警部長と門司の市長が其處に小蒸汽で來て、其時初めて常陸丸の慘況を聞いたのであります、吾々が門司に這入つた時はどう云ふ有樣かと云ふと彼の大和艦が居つて大和艦の檣が折れて居る、何の爲に折れたかと言ふと、常陸丸或は佐渡丸のことと聞いて皆々助けに出やうとする拍子に馬關の港の內で衝突して其餘勢で大和艦の檣が折れたのであります、一艘の御用船は其處に沈んで居つたのであります、一は大變な怪我をして居つた、三艘が行き當つた爲に一艘は沈み、一艘は怪我をして、一艘は檣を折ると云ふやうな有樣です、定めし其時の模樣は酷いものであつたらうと思ひます、常陸丸は愈々沈んだと云ふことを聞いた時に吾々は殘念に思つた、七時二十分に吾々の船は海峽を出た、出ると佐渡丸は向ふから引かれて來たのです、二艘の蒸汽船が佐渡丸を擁して行く所の狀況を見ました、是は甚だ殘酷な有樣でありました、定めし負傷した者が多からうと云ふことを想像せられた、未だ詳しいことは知れませ

ぬが吾々の船もまかり間違へば擊られると云ふことと
て、殊に外來の客を連れて居るから早く佐世保の方
に行かなければならぬからさう云ふものを能く調べ
ることも出來ず、福岡の沖の方に進んだ、さうして
海上も風波がない、前に申したやうな氣焔が盛んで
ありました、其時に丁度午後一時十分頃に肥前の大
島の沖に於て電信が掛つて來ました、即ち佐世保の
鎭守府長官の鮫島さんからの電報であります、電報
に佐世保御着船の上は晩餐を差上るから其仕度の儘
て御上陸んなさいと云ふので、叮嚀な御案内です、
即ち無線電信で生れてから第二の無線電信を請取り
ました、それから六時頃に船が這入つた、此佐世保
と云ふ所に船が這入ると皆蒸汽船の這入つて居る所
の後方に旗がある、それが皆さがつて居る、是れは
能く言ふことはありませぬが、皆遠方から石炭を持
つて來た〇〇の船らしく見える、私が明治十七八年
の頃には佐世保の市區改正員で居つた、私が極く小
さい時と言ひたいが大分歳を經つて居つた、丁度二

十年前であります、それで此地に來つて墓地はどう
であるか水道はどうであると云ふ計畫を遣つたこと
がある、其時は纔か數百の寒村であつたが、今日は
十万以上の人口を以て居る市になつたのでありま
す、港内は悉く浚渫されて大きい船が這入る、以前
はナカ〳〵石が澤山あつて這入れなかつたのである
が、今は何艘でも船が繋がれる、陸上には鎭守府の
多くの家が美麗に聳えて出來て居る、初瀨艦長に會
ひました、初瀨艦の沈んだ時の有樣を聞いたが、其
沈んだ時は隨分えらかつたと云つて居つた、とんと
沈んで仕舞つて氣絕して仕舞まつた、人事不省にな
つたのであるから少しも分らない、實に其有樣と云
ふものは殘酷であつたのでございます、其時の詳し
い模樣は餘り知れませぬが此中尾大佐の話を聞いて
大いに感じたのであります、其時に御馳走があつた、
私共は船に歸つて二十日の午前に上陸して爲松樓と
云ふ所で立食の用意をしてあつた、それで町を廻つ
て見て、それから工場を見ました、又病院も見まし

た、皆貴衆兩院が一番初めに行つたのであります、病院には實に用意が能く出來て居ります、看護婦なども一生懸命に看護して居ります、病院では備はらざるものはない、そこで海軍の傷はナカ〳〵大きいのであります、破裂丸が來て胴でも何處でも一偏に持つて行くか、或は身體ぐるみ持つて行くか、助かつた者でも大變な傷であります、殊に氣の毒に思つたのは、初瀬などの沈んだ時の火傷であります、汽鑵が破裂して火傷をした所の殘酷の樣子と云ふものは實に眼も當てられない、幸ひに生命は助かつて居るが皆皮が剝けて繃帶をして目をパチ〳〵して居る、或は顎を落されて居る、或は手を剝がれてある、足を剝かれてある、斯う云ふ有樣でございます、それ等の事を自から能く見舞ひ申した、玆に於ては赤十字社救護班が能く盡力されて居ると云ふことを皆さんに記憶して貰はなければならない、今度は各工場を見た、そこで私が一番初めに見て驚いたのは港は立派になつて居つたのと、それから家が增えたと云ふことであります、其工場の大きくなつたのも驚いた、船渠も數口置かれてあるのみならず新らしい船渠が出來つゝあるのであります、それから分捕品の在つた所です、それには西洋人も驚いたらうと思ひます、ワリヤーグから揚げた大砲が皆立派に磨かれてあつた、それからマンチユリヤと云ふ大きな一万噸からの船を取つた、それは旅順港口に這入らんとする所を押へたのであります、それに通信機關、大砲、小銃、彈丸などゝ非常なものでありましたが、之を皆卷上げて仕舞つた、それが倉庫に積んで在つた、殊に此通信機械と云ふものを取つた爲に非常に露國では困るだらうと云ふことを感じるのであります、それから殊に私共が見て感じましたのは病院船であります、病院船と云ふものは、嘗て露西亞の皇帝がどうも戰爭は仕たくない、內々は太い事を遣らうと思つたが戰爭はしたくない、宜しく兵隊を各國で增さないやうにしたらと云ふやうな計畫を出して遂に其結果として和蘭のヘーグで會議がありま

した、之を名けて平和會議と申します、其時に戰爭をしても病院船を撃つことは出來ないと云ふことは極めて、病院の船は白く縫つて線の筋がある、神戸丸と云ふ船が病院船であつたがナカ／＼立派でありました、何にもかも備はつて居る、病室には七十四人も容れられる部屋が二ッ在る、士官の部屋とか或は通常の人を容れると云ふやうな所があつて、下士官の室、上長官の室と皆別々であります、それで戰爭の時には氣遣ひになるものがある、さう云ふものを入るので重傷室、傳染病室、寫眞室、光線室、科學室、繃帶材料室、夫から浴室、指揮官室、洗濯所、乾燥室、それから火熨を遣る所、それから處方室、外來診察所、何でも備つて居る、殊に氷室の如き、氷を拵へる機械拵も備つて居て非常に清潔でありました、是は本田軍醫大監の監督の下に大急ぎて拵たので、殊に之を拵へるには川崎造船所て非常に海軍から支出せられたよりは金が餘計費つて出來て居る、それから茲に外來診察所と云ふものがある、船の中て外來診察所と云ふのは少し可笑しいやうであるが、それは御存知の通りに此外の船が其近傍に着いた時に醫者の無い船が在つたら其病院船に行つて治療をして貰ふ、此船の如きも入院した者は狂人が三人あつたと云ふことでございます、皆收容されて居つた、それから港に來ると海兵團の病院に送られるやうになるのであります、私はさう云ふものを見て其日五時に歸つた、歸えると松村大尉が俄かに命により先に根據地に行くと云ふとて（滿洲丸の行先き）其時に皆三鞭酒を呑んで松村大尉の爲に行を盛んにした。

六月二十一日には午前五時頃に起きまして私共皆海の即ち鹽の湯に這入つてそれから捕獲船を見に行きました、檢疫所、それから水雷母艦と云ふものを見ました、此話は水雷母艦と云ふものは即ち水雷のおつかさんであります、御承知の通り水雷の中では總てのものが備へてある譯には行かない、總て不自由てあるからおつかさんが行つて乳を遣るのであります、即ち水雷も遣らなければならない、魚形水雷も

あらうし、機械水雷も皆與へて遣る、或は又子供の船に上つた時には髪も刈つて遣る、風呂にも入れて遣ると云ふやうなことは皆此水雷母艦がするのであります、其外石炭も與へなければならぬし、食物或は水なども皆おつかさんから貰ふのです、それで母艦と稱へるのです、それから此船の現在船員が澤山乘つて居るのも水雷艇に居る人が斃たれると其母艦から補充して行くのであります、殊に大きな船であるから水雷などに乘つて居つては運動が出來ませぬから此船に來るとおつかさんに子供がたかると同じことで喜んで運動をし、或は色々なことをして暫くの間休むことが出來るのであります、吾々は一同此模樣を聞いて水雷艇の豪いと云ふことをも感じました、其際十一時過ぎに俄かに歸れと云ふ信號を滿洲丸より受けました、それから其日には二十一日の午後十二時過に歸つた、すると滿洲丸が出帆との事て其時に鮫島長官が送られた例の樂隊で送られた、佐世保には二つの水雷が居つて吾々を玄海洋に送つて呉れました、其時に色々話があつた、玄海などに來た所の敵を斃たなかつた瓜生艦隊はどうであると云ふ噂もあつたが、斯の如き廣い海で軍艦を以て竝べる譯には行かない、そこで運送船が蜘蛛の如く兩方から出て居るにも拘はらず、之を一々保護すると云ふことは困難であると云ふ事情を見て大いに悟る所がありました、今度は日本海を離れて朝鮮の方に參るのであります、前に申しました通り種痘をしない者は種痘を遣れと云ふことであつた、それで私も種痘の加勢をしやうと云ふので、一つの食堂に集めて私が始めには獨逸の新聞記者をやつた、さうすると我も〳〵と大きな腕を出して其者に種痘をしてやつたのであります、私は三十四五人もやつた、それて種痘する樣などは綺に書かれて仕舞つて、英吉利の新聞に出て居るだらうと思ひます、デ旅順口の陷落の日は六月二十日に投票を開けると云ふ約束でありました、それて其日に開けましたが面白い事があります、私が一番終りの積りて居つたのがさうてな

かつた、それから旅順口の落るのは此滿洲丸が着く三日前と云ふやうな入札などは隨分一與であつたのてあります、これから船が仁川に着く時に鮫が一つの死體を食ふのを見ました、丁度仁川に着く前てありましたが、吾々は此鮫が死體を食ふのを見て大いに淚を滴したのてあります、何となれば着く少し前には常陸丸の遭難者が斯の如き魚腹に葬られたらう、實に殘酷なものてあると云ふ感が起つた、鮫は喜んて仕體を咬えて沈んだり浮いたりして居りましたが、其衣服が黑いから朝鮮人てはない、恐らくはワツヤーグかコレーツの者だらうと思ひます、此前に常陸丸などは沈んて居るから大島の沖近傍は常陸丸の者も矢張斯の如くあつたてあらうと云ふ觀念が起つたのてあります、それから吾々は直ぐに上陸を致しましたが宿る所などは色々吟味しました、私は同姓なる山根少將が居つたから之を尋ねて行きました、暫時山根少將と語つて此處に一緒に寢たのてあります。

六月二十三日には丁度山根の所に遣つて居る所の通譯と共に市中を廻りました、第一に行つたのは兵站病院てあります、兵站病院に行つて見たが何處を充たされたかと云ふと東本願寺てあります、患者を百人も收容するに足るのてあります、寺の後には韓國の皇室の所有の建物があつた、此家も病室にしてあつた、又百人位入れられるのてありませう、それて病室は狹い、患者は四疊半に赤痢患者の如きは五人六人這入つて居る、皆さん如何てございませうか、日本などて病氣をしたらナカ〳〵大きい室に入れて置くが朝鮮てはさう云ふ譯てあります、實に氣の毒なことてはありませぬか、各病室を廻つて慰問を致しましたが斯う云ふ時の相談は何時でも山根正次がやつたのてす、醫者てあるからどうか宜しく賴むと言つて名刺を呉れる、それを持つて歩いた、デす本院は二月十八日に開かれたのてありました、六月二十二日に收容したのが六百六十人てあります、死んだのは割合に少ない、開設以來死亡が七人てありま

す、所で病院に送つて來られるのは大變澤山居つたのてある、丁度龍山丸とか云ふ船で患者を送つた後てございまして、其時の患者は百十四人居つた、それて此處には矢張赤十字社の第百〇七救護班が居つた、院では河原田良臧と云ふ人と小川と云ふ人其外書記が一人看護長等が居りました、さうして此處には近藤一等軍醫が醫務長てありまして、外に三等看護長が一人軍曹が一人居つた、此病院を出て此仁川の小學校を見た、小學校の生徒は五百名ばかり居ました、ナカ〳〵盛大てあつたのてす、此處には色々なものがありましたが略して置きます、そこで仁川の主なる日本の居留民から吾々を歡迎すると云ふことてありました、それは遠方から來た所の勞を謝すると云ふことてありませうが、其時に色々な注文の話が出た、早く日本をどうして貰ひたいとか、斯うして貰ひたいとか云ふ話が出た、其中にも皆さんにお話をして宜いのは即ち日本の內地に居る小學校教員に對しては恩給などが出るやうになつて居るが、海外に居る日本帝國臣民を教育する所の教員に向つては何等のこともない、どうか是は心配して吳れと云ふやうなことてありました、朝鮮ては內地の教育よりも苦勞が多いのてす、澤山の人を教へて居るのであるから非常に困難なことに信ずる。

デ私が仁川市中を廻つて眼に映ずるものは何てあるかと云ふと痘痕の多いことてす、アバタがナカ〳〵澤山てあります、それから殊に感じたのは日本人が往々洗足で歩くことがある、ペストの爲には洗足て歩くのは宜くないと云ふことを言ひ出したが、所が今日尙ほ洗足て歩く者がナカ〳〵多い、韓人には洗足がない、甚だカンシンなことてあります、(此時笑聲起る)それから居留民は八千人程あります、それから居留地の市街は淸潔方正てあります、其中にて韓人は非常に不潔てありまして、亂雜なること名狀すべからざる程てあります、飮食店の如きは實に眼も當てられない、何故かと申すと蠅が非常に多いのであります、これは日本人の一番敵であつて露亞西人

より蝿が恐ろしいと云ふのであります、眞黑に群集して居ります、ナカ／＼追つても容易に逃げない、それから今度は京城に這入るのであります、吾々は京城の方に行つたが、其時は午後の二時でありまして、午後五時四十分に京城の南大門に着きました、在京の吏員が來て車を持出して迎へ旅館の衛生館と云ふのに參つた所が客が多くつて支へて居る故、僅か一小室を借りて寢たのでございます、

六月二十四日は炎暑が最も甚だしい日でございました、露西亞と戰爭をしなければならぬと云ふ聲を高くした連中の對露同志會と云ふものがあつたが何ても寫眞を撮さうと云ふので紀念として撮した、それから東本願寺の別院に近衛公が御祭りをしてあるから其處へ行かふと云ふので、近衛公の爲に拜をした、二十四日は皇室の 招待會で吾々は公使館に行つて公使と同行して彰德宮と云ふのに參つた、其門に至れば即ち宮内大臣、其他の百官が出て迎へて居つた、それから黑田侯が主となつて各大臣などに話をして居つたが、御馳走の時には韓國の宮内大臣は日本皇帝陛下の萬歲を唱へ、黑田侯爵は朝鮮皇帝陛下の爲に萬歲を唱へられたのであります、此御馳走が濟んで景福宮と云ふのに至つた、此景福宮の宏大なるには又ケイフクしたのであります、（笑聲起る）是は四十餘年前に大院君が非常に暴政を行つて國民の膏血を絞つて建築したものでありまして、殊に此宮内の慶會樓と云ふ如きは實に立派でありました、柱などは御影石で出來て居る、それから。

二十五日には拜謁を賜ると云ふことでありまする故、私は最も早く起きてさうして京釜鐵道の架つて居る所の水源の池と云ふのを見た、其池には大きな堤が在つて、それが即ち水源であります、三方山で包んで一つの大きな池を形作つて居ります、それは田の水を溜める所であります、そこで抗眉亭と云ふのがあつて、其處に行つて暫らく休んだ、それから十二時三十分に京城に歸つた所が、日本婦人會と云ふのがあつて其處で一場の演說をしろと云ふ注文が

あつた、三時には宮中に出なければならぬのに演說をしろと云ふのは甚だ困つた譯であると云つて斷つた、併し二十分でも卅分でも宜しいからと言はれたから、そこで無據く私は例の手を能く洗はなければならぬとか、或は水を大切にしなければならぬとか、朝鮮人には能く水の大切なることを言つて聽かせなければならぬとか、或は蝿はいけないなど丶云ふやうな事に付て一場の演說を致した、デそれを濟まして日本の居留民の倶樂部に參つた、さうして一同腕車を連ねて宮中に出たのであります、是は新聞にも書いて居つたから詳しきことは申しませぬが、先づ一番始めに外國武官が拜謁を得た、夫は外國人てあるから、殊に先きにやつたのであります、然して貴族院も濟み衆議院は一番長かつたのであります、何故長かつたかと云ふと、それは衞生上の話があつて長かつたのです、色々陛下から御馳走を賜はつた、又日本の爲に同情を寄せられたことを田口博士から上申なした、さうすると何か面白い話はないかと云ふやうな事からして、丁度六月二十五日、即ち拜謁を賜はつた日が旅順陷落の日であると云ふことを投票したのが田口博士である、それで私が皆に大いに笑はれたのは、旅順陷落が餘り早い、丁度今日が落ちる日だと云ふことを投票をしたと云ふ御話を申上げました、そうすると皇帝陛下はぬからず、ヤ、今日は尙ほ日が高いから追付け落ちたと云ふ報知が來るだらうと云ふやうなことを言はれた、それからモット何か面白いことはないかと云ふことから、——是は私の話でありますが、それはどう云ふことであるかと云ふと、日本人の一行の中に居る山根正次と云ふ醫者であるから、此富國强兵の基は何に在るかと云ふと、其國民と云ふものが强壯でなければならぬ、强壯を圖らうと云ふに付きましては衞生の途と云ふものが行はれなければならぬ、此道が行はれなければ國は繁盛しない、殊に日本帝國の如きは子孫繁盛で年中小兒が澤山出來て皆壯健で居ります、御國に參つて見るとアバタの人が澤山在るやうでござ

いますが、宜しく種痘を勵行されたら此人民の滅ると云ふことがないやうになつて、御國が益々富國強兵に進むてあらうと云ふことを申上げました、さうするとさう云ふことは皆醫者から申して五年も前に其令は出して居るから五年前の人にはアバタがある者もあるかも知れぬが、五年以後の人は無い積りだ、そんな拍子に一發遣られたからそこで仕方がないから、さう云ふ御仁政に預つて居る國民は仕合せてござると云つて褒めて置きました、それから尚ほ色々話があつて遂に其場を引去つたのであります、故に衆議院が一番長くなつたのであります、それから私共は兵站病院に參つた、兵站病院を見て、それから脚氣病院を見、又赤痢病院を見た、それから今度は兵營に參つた、在朝鮮の日本兵營は立派です、衛生の如きは非常に能く行屆いて居る、それから公使館に參りました、さうして御馳走があつた、其時に朝鮮人が樂隊をやつて居る、それは非常に立派てあつた、「君が代」などをやつて實に立派てあつた、其時に洒落れた人がありました、「朝鮮に過ぎたるものが三つある「御世辭樂隊廣軌鐵道」御世辭と云ふことは陛下のお世辭が上手だからと云ふので「御世辭、樂隊、廣軌鐵道」こんな冗談を言つた人がありました、それから二十六日の朝早く私は野菜の市場を見に行つた、色々のものを賣つて居ります、ナカ〱野菜が高い、一反の野菜が百三十圓位する、それ故に高いのです、朝行つて見ると兵隊も巡査も皆來て買ふて居る、肉もあります、魚もあります、其處には皆下等の女子は買ひに行きますけれども上等の人は出て來ないやうであります、それから其日には日本人倶樂部で御馳走があつた、それから其日には私共は彼處に韓城病院と云ふのがあつた、それを見たが病院は古い家を直して病院にしてある、和田と言ふ海軍々醫が院長となつて居る、それから十七人程病人があつた此京城には殆ど病院が無いと言つても宜しい、色々日本人の軍醫達も皆醫者をして助けて居るが、是等は非常に不自由てあります、日本人

は非常に多くなるけれども病院の用意其他は何ほ缺點が多いのであります。

それから二十七日には仁川に參つて午後五時に海州灣に出たのであります、仁川を發して海州灣に出ましたが、どうも瓦斯の深いから早く行かれない、漸くにしてタクションと云ふ島に行つた、それで之に碇泊して小艇に乘じて島に上つた、此島では通信官吏及び水兵水夫寄合せて十八人程居ります、此島に即ち役務を執つて居るのでありまして、絶域の孤島に在つて軍國の用務を執つて居る所の其勞と云ふものは國民として十分に謝さなければなりませぬ、吾々は其島に行つて酒、莨、蜜柑等を貽つて慰問を致しました、モウ戰地に近い所でありますから吾々は寢る時には點燈を消して寢るのであります。

それから二十八日には灣を出て北の方に進み此十三哩の所に濃霧の爲に船が少しも行かない、故に少し灣の方に戻つて其處に錨を投じた、其時は大變暑いそれに既に船中に於ては下痢患者が出來、或は熱病に罹つた者もありました。

七月一日は降雨を侵して鎭南浦に行かうと思つて未だ暗いけれども船を出した、併ながら五分毎に笛を鳴らすのであります、晝でも眞暗であります、上村艦隊がどうであるとかこふであるとか云ふやうなことを申しますが、海軍が困難であると云ふことは此瓦斯のかゝる程困難なことはないと云ふことが分ります、それであるから小心翼々として或は汽笛を鳴らし、或は喇叭を吹いて進んだものであります、さうして無線電信の在る所の「チョッペー」と云ふ所に船が行つたのであります、それが二時四十分でありました、其時に船中に於て旅順の戰報を聞いた、其時には何處から來たかと云ふと、今日は言つても宜しいが○○島と云ふ島から來たかと思ひます、四時半に又船が止つて仕舞つた、さうして夜寢るには皆眞暗にして居る、眞暗にして居ると俄かに探海燈が光る、サア大變だ其時可笑しい事がございました、俄かに火が消えて吾々が食堂に行つて何か食べ

よふと思つて這入つて行た所が俄かに電燈を皆消して仕舞つてサア何だか分らない、おでこの突き合ひを遣る者がある、何事かと言つて居るが一向電氣が點かない、て探り／＼出て見ると今敵から探海燈を輝かされた、さうして確かに二發の砲聲が聞こえたと云ふことであつた、併ながら此覺悟をして居るから、お寺の地震のやうにドウ震をする者は一人もなかつた、それから今度は逃げなければならぬと云ふ騷ぎでございます、僅かの時間に用意が出來て他の方向に向つて逃げたのであります、それは殊に淺い方へ淺い方へと逃げたのであります、即ち軍艦が來られない方へ一生懸命に逃げたのであります。

七月二日の十一時に海洲灣に歸りました、さうすると午後四時に黑田侯爵、小笠原中佐又吾々が一名タクション鷄島に上陸つた、其時に何う云ふことを聞いたかと云ふと、其島に行つて見ると米が一粒も無いと云ふことである、故に吾々は米を三俵積んで此處へ上つた、何故上つたかと云ふと例の露艦騷動であります、瓦斯が掛つて居つて又彼方の方に歸ることも出來ないのみならず、再び露艦が現はれたと云ふことであります故、運送船が來ない、此電信に掛つて居る人が食物が無くなつて居ると云ふ始末、ソコデ吾々は其米を持て上つたのである、其人々は非常に悅んだのでございます、是は實に特別の任務を負ふて居るのであります、そこへ行くと僅か十八人居りまするが戰爭が始つて以來其處に居て海底電信の事務を執つて居つて諸方面に傳へて來るのであります、皆さん考へて御覽なさい、沖の中で食物が無い際にはどうでありませうか、けれども尙ほ皆不自由を忍んでやつて居つたものであります、(此時流涕するものあり)其前には皆船が來ると云ふので米を取らずに居つたのであります、鍋島正四位鍋島圭三郎伯爵廣澤の三君と不肖とより福神漬とか或はハムの一股とかを持て送つて上げたのであります、それから船から其島に上ると薔薇が咲いて居るから非常に好い匂ひがございます、私は忙れずにそれを取りに行つたが、聞

けば此島では大變な毒蛇が居ると云ふので非常に危險であつたが、併し犬が一疋嚙まれたばかりで人間は嚙まれない、其毒蛇の居る島に十八人は戰爭が始まつて以來電信の業を執られて居る、是等の人が斯の如く勉強して吳れるから戰爭が出來るのである、唯戰つて居る者ばかりが苦しいだらうと考を有つて居つてはならない、此島の中に居つて働く人があるから皆それ〴〵の事が知れるのであります、故に同情を寄せるには獨り此戰爭をする者ばかりに付て、或は勇壯であるとかなどゝ言つて新聞には書いてあるが、斯樣な難儀をして居る人のことは餘り書かない、私はさう云ふものではないだらうと思ひます、（流澌するものあり）それから碇泊して居つた今の島から船を漕いで歸らうと云ふ時に、俄かに船が澤山見える、それから私は望遠鏡を持つて居つたが、小笠原少佐が貸して吳れと言つて其望遠鏡で見ると何でも水雷艇のやうです、サア敵艦が來たのかと皆躊躇したやうな樣子が見えた、併し能く見ると確かに日本の運送船であらうと云ふ人もあつたが、併し續いて五艘來たから何となく心持が能くなかつた、それから滿洲丸に戾つて近寄つて見ると、皆日本の運送船であつた、敵の軍艦が逃出したから、そつちに行くかも知れぬと云ふので皆此處に來たと云ふことであつた、其時は色々澤山の船が這入つたけれども其中一艘京城丸と云ふ船が居つた、是は運送船であつて、吾々は水を貰つたり新聞も借りて讀んだ、それから再び元山を露西亞が攻擊したと云ふことも聞いたのであります、さうして大方戰があつたらうとか色々なことがあつたが、其時には例の瓦斯の爲に見失つたと云ふことで非常に殘念がつて居つたのであります、京城丸には水兵が百人居ります、吾々は色々の物を水兵に遣つて、誠に柔順であります、それで私がとうた諸君は軍歌でも遣らないかと言つたら、上官の許がなければやることが出來ないと言つて居つたであるから廣澤伯直ちに卅部中佐の所に參られ許可を得られたそこでサーヤレト云ふので遂に錨が見ゆる

……と云ふ歌などを歌つたのであります、其時には鍋島正四位と鍋島圭三郎と申す方々と一人は廣澤伯杯であつたが其勇壯の聲を聞きつけて其外新聞記者外國人も皆集つて參つたが、殊に亞米利加の新聞記者チナン氏の如きは涙を流して居つた、何故かと云ふと斯う云ふ鹽梅で人が皆死にゝ行くのである、實に皆氣の毒であると言つた、其人は彼の初瀬や宮古に乘つて居つて一偏海に沈んだ連中で今度は助からないでも宜いと言つて居りました、吾々も共に涙を以て彼等を送つたのであります、實に其温順には驚く程であります、此軍歌を歌ふ時の勇壯な風にも驚く程であります、（流涕するもの多し）それから其船は十二時に鎭南浦に向つたが、其時に丸艘の船が逃けたのであります、吾々は迂濶すると例の鮫に喰られたのでありますが、幸に無事に濟んだ、それから午後十一時即ち三日の十一時に鎭南浦に着きました、それから領事民長が迎ひに來た、吾々は早く來らなければならない者でありましたのに、吾々が行くとが遅かつたから非常に鎭南浦では氣かつたのであります、それから其日には吾々は上陸をすると直に黒川侯と共に病院に參つた、此間長岡護美さんの御子息で戰死された方は其時の前の日マデ病院に居られた、それは安東縣で怪我をしてさうして後送されて再び行つた所の怪我であつたと云ふことであります、其時に脚氣患者が多い、赤痢患者も二人あつた、莨などを送つて慰問をしたが、あちらの兵站病院では隨分不自由なもので、毛布を布きて寢かせてあると云ふやうな有樣であります、併し能く手が屆いて居ります、それから茲で領事館に行つて色々問ふた事もありますがそれは後から御話を致します、それから午後六時には飛溌島と云ふ島が在る、それは公園であります、其處で御馳走があつた、其時にも色々な戰報があつた、日本の軍艦が敵の何々を沈めたと云ふ電報が來た、一同三鞭酒を舉げて陛下の萬歳を稱へ海陸軍の萬歳を祝したのであります、それで此鎭南浦と云ふ所には立派な家があります、日本人もナカ

ナカ住んで居ります、後で此れを御覧なさい（此時寫眞を示す）是が鎭南浦であります、此處の白いのは日本人の家です、是は米屋です、飛澄島と云ふのは此方の隅です、それから今は日本人は居留民を一緒にして千二百人ばかり居ります、支那人が三百〇四人居ります、英人も一人米國人が三人佛蘭西人が三人皆是は日本の領事館が管轄をして居るのであります。

それから四日には、飛澄島の懇親會に來た人がありますが、私が元と教えた人であつて、長崎の學校に教師をして居つた時分に教えた人であります、此人は古藤遜と云ふ人でありますが、此人は明治二十五六年から朝鮮に行つて、さうして非常に韓人に好かれて居る、是は醫者で、此人は了見が高い、何故かと云ふと韓人を能く手馴付けて居ります、醫者も上手であります、それで朝鮮人は女も男もかゝるやうになつて居ります、此人は韓人の有志の四十人と共に醫學校を建てんとし色々盡力してトヲ〳〵學校を建築しました、さうして日本の語學を教える、それから日本の醫學を教えやうと云ふ所で戰爭が始つたから皆有志が怖れて逃げて仕舞つたのであります、此韓國の中でも鎭南浦の近所には金持が多いのでありますが、日本人でも何でも一體が醫者を賴むにはどう云ふ有樣であるかと云ふと、朝鮮人は是は幾日で癒るかと云ふと三十日なら三十日と云ふと必ずそれだけの錢を先きに取る、それから日本人は三十圓なら三十圓呉れと云ふ鹽梅にして三十圓を拂ふ、さうすると三十日藥を服んでも癒らぬと、それはお前が俺の言ふ事を聞かないから癒らない、モウ三十日服めと言つて必ず請合ふと云ふと又三十日服む、斯う云ふ鹽梅にしてやつたやうな風がある、それは立派な所の醫者ではありますまい、さう云ふ者が醫者をして却て聲望を失なつて居る、併ながら此古藤遜と云ふ人は之に反して病氣と云ふものには請合ふことが出來ないと云ふことを說いて聽かして、さう云ふ鹽梅に請合つて呉れと云ふなら癒つたら何時でも來い

と云つて十日で請合つてそれが七日で癒ると後の三日は戻してやつた、成程先生が言ふ通り十日と云つても七日で癒ることがあると云ふことを言つて聽かしたのでさう云ふことが分つた、さう云ふ譯であるから此古藤邇でなければならぬと云ふやうに鎮南浦では言つて居ります、故に態々遠方から藥を貰ひに來る、それで古藤と云ふ人の奥さんが調劑をする、其處へ行つて大いに御馳走になつたりしました。

それから五日であります、五日には大同江を遡つて彼の平壌に參つた、平壌に參つた日は雨の降る日の隨分皆濡れました、此處に寫眞がありますが、是は平壌の全景であります、（此時寫眞を示す）平壌に行つて吾々の船は大同門の前に着きました、船が横着けに着くと日本の軍隊は無論或は朝鮮の警察官或は彼の地に居る小學校の生徒とか、雨の降る日に傘も翳さぬで出迎へに來た、如何にも憫然に思ひました、それから第一番に大同門の二階で今日は是れ是れの用意がしてあるから、是れから御覽なさいと云ふことを染井と云ふ領事から聽いて第一に行つたのが兵站部であります、其日は朝鮮中で平壌は汚穢であると云ふことであるから、私共は殊に雨が降つて居りましたから雨合羽を着て雨靴を穿いて行つた、後は草鞋がけで行つた、サア困つた丸で田の中を歩くやうでありました、殊に貴孃方に申上げると甚だ妙な感じをなさるやうでありますけれども、吾々が驚いたのは例の蠅です、平壌は我が軍隊の赤痢に罹つた所であるから皆注意をしなければなりませぬ、吾々は米屋を見て一番驚いた米屋と云ふからチョイと見ると眞黒だ、是は黒豆を賣つて居るのであらうと思つた所が、能く見ると米に蠅がたかつて居るのです、日本などは其樣なことはないから實に驚いた、それから領事に連れられて道路を通つて行つたが、道路は非常なものでありまして、又不潔でありました、不潔のことは今日は餘り申しませぬ、それから私共は前に明治二十七八年の際に平壌の大戰爭のあつた模樣などを見て其處に墓がありました、萬壽

臺と云ふ所にあつた、日本人の爲に招魂の碑がある、それを見て、それから七星門と云ふ門を通過致してそれから箕子の廟です、箕子廟に出て例の原田重吉氏が破つた彼の玄武門に這入つた、それから牡丹臺に上つた、牡丹臺に上ると平壤から大同江の方は皆見えます、それから私共は浮碧樓と云ふのに參つた此處で歡迎され立食の饗應があつて、雨の降るに拘はらず出立致しました、それから今度は又船に乘つて歸りました、それで大同江を下つて鎭南浦に歸つた、鎭南浦に居ることは十日間でありまして、是は非常に閉口したが此處で朝鮮人の有樣を御話ます。

一つ私が朝鮮人の風をして御目に掛けます、朝鮮の風俗は色々ありますが何分不潔な人民であります、併ながら衣服は皆白てす、私は此處へ色々の物を持つて來ましたから之を私が着て見せます。

（演者其携へられたる實物を以て彼の地の服裝其他風俗の一班を示す）

斯樣な風てあります、それから朝鮮人と日本人の關係は大變に宜しい、京城から仁川釜山の方は隨分惡く言ふが此處ではさうでない、殊に戰爭以來金が落ちるから評判が宜しい、それから食物に付て御話をしなければならぬ、彼地では肉食であります、朝鮮人はナカ〳〵大食であります、丼などで澤山飯を食べるから人を雇つて置く時はもりきりてなければ損てす、朝鮮人は大きな鍋が在つて、それを火に掛けて其内に何にも斯も野菜を入れて煮るのです其汁を掛けて食ふのです、それから牛も良いのが澤山あります、又力も強い、強いと云ふのは二斗入の叺を二つ脊負つて十五里位は平氣で歩きます、併ながら惡い病氣があつて蔓延して居るから、それが爲に次第に朝鮮人が減ると云ふことてあります、それから道の事だの家の事だの溫突の事だの色々御話することがありますが、餘り長くなるから、それは略して置きますが、唯此溫突と申すのは家の内に在つて、溫度を取るから溫突てございます、是は日本の炬燵と同じことてす、私は經濟學會で溫突が朝鮮を亡ぼす

と云ふことを話したことがあります、それは今別段に詳しく申しませぬ、それから彼の地の人間は早婚であります、十二歳位で結婚を致します、男の方は十二歳女は何時でも二十歳とか十九歳とか二十四五歳のがあります、それで上等程が早く結婚を致します、一般の韓國民は懶惰者であります、これは此位にして置きませう。

今度少し御話したいのは丁度十二日頃には平壤の御馳走が濟んだが矢部軍醫監と黒田侯爵が病氣になられた、それから吾々は此兩人を鎭南浦の病院に預けやうか、どうしやうと云ふことであつた、兎も角も出やうと云ふので十二日に漸く出た、それから朝向ふを見ると一つの病院船が行く、それは横濱丸であつた、横濱丸には私の知つた看護婦などが乘つて居る彼の船に行つた方が宜いだらうと言つて其船に連れて參ることになつた、それで病院船の方に向つて病室はないかと云ふことを信號を揚げた、所が、病室はあると云ふことであつた、それでは此方に病人があるから一つ取扱つて呉れと云つて頼んだから確に承知したと云ふ返事を得ました、お前の船には醫者があるかと云ふから山根と云ふ者が居ると云ふことを返答した、それから其次の日の十四日には横濱丸に其病人二人を預けてそれから海軍の根據地に向ひました、是から一つ御話をしなければなりませぬ、それは主なる慰問のことであります、是から先をどうか能く聽いて戴きたい、十四日には横濱丸と別れてそれから漸々船が黄海に進んで參つた、海洋島を眺んで、さうして海洋島の沖では御存知の通り坪井將軍が第一艦隊の司令長官である際に烈い戰爭があつた、其時には聯合艦隊の司令長官は伊東さんであつた、彼の吉野艦に居つて戰爭した人は川口少佐であります、それが少尉であつた、小笠原少佐は浪速艦に居つた又一の曹長此三人が黄海の戰爭に居つた人であります、十四日には即ち佛蘭西の獨立の日であります、故十二時佛國士官に向いて祝意を表し「シヤンピン酒を擧て佛國の爲め萬歲を唱へた後

にサテ今日は幾年家ひ戰爭に與つた此黄海を航海するのであるから祝ひ事をしやう、それには日本酒を飲むが宜いと云ふので皆一同甲板に出て日本酒を飲んで山口少佐と小笠原少佐と下士官等を呼んで來て、皆其三氏の爲に萬歲を唱ふる、船の中で胴上げをした、外國人も日本人もやりました、さう云ふ工合で今迄の欝を忘れて居つたのであります、其折から運送船がドン／＼出て來る、何でも根據地は近いに違ひないと云ふから見ると、大變に山がある其山がどう云ふ鹽梅であつたかと云ふと（此時圖を示す）斯う云ふ工合に重なつて居ります、此處に煙が見えるのです、だから何でも此山の後には必ず軍艦が居るだらう、あれが根據地に違ひないと思つて進んで行つた、斯樣に滿洲丸が行くと水雷艇が出て來た驚いた、そこで吾々は鹽大澳と云ふのに這入つた、此鹽大澳は即ち第二軍が上陸した所であります、其處へは風の吹く兆候があるから此船に續いて來いと云ふ信號が上つた、此處を一寸見た際は數百艘の軍艦があつて、皆煙を立て居りました、大變な煙りが上つた其愉快さと云ふものは一方ならないのでありましたそれば鹽大澳に往けば此處へ上つてはいけないと云ふのです、一つの運送船に依て根據地の邊に行つて泊つた、其時には餘程の警戒をしなければならぬと云ふことであつた、其處に居ました軍艦は濟遠號でしたその士官などの來訪があつたりしました、朝は大變瓦斯が深い、所が前の晩に居つたやうな船は皆逃げて居らない、併し煙は尙ほ認めて居つたのであります、それから此處は商船の居る所でない哨兵船が居るに足らないから他方へ行くと云ふので此島の後方に來て居つたのであります。それでナカ／＼旅順が落ちない、旅順の落ちないに付ては宜しくお前方は歸りたいか、歸りたければ歸つて呉れと云ふことであつた、所が吾々は戰爭を見に來たからは旅順を見なければならぬと云ふので、多數の人は歸らないと云ふことでありました、所が未だ東鄉司令長官にも逢はれない、戰爭も見ないで

歸ると云ふことは面白くないと云ふやうな念があつたから吾々は盤大澳に留まつて居ると云ふのであつたが、遂に聯合艦隊司令長官にお目に懸ることが出來た、明後日は或所の島でお目に懸らう、其際は大連灣青泥窪旅順等を見せると云ふ通知が來た、吾々は悦んだ、それで御話しますが吾々は十七日に其處を立つたのであります、それから十七日の朝早く出て、さうして盤大澳を横目に見て又根據地を横目に見て大連灣に向つたのであります、其時に遼東の地を望み、病院船の行くのを見、或は水雷艇が列を爲して進むのを見た、誠に水雷艇の行く所、或は驅逐艇が行列して行くのは非常に愉快に感じました、それから私共は其有様を見て黄金山の方に近寄つたのであります、あれが黄金山だ是が老鐵山だと云ふやうなことであつたが、若し深く行つたら何時敵の船が出て來るかも知れぬから油斷は出來ない此位にして早く歸らうと云ふのでそれから約束の島に着いたのであります、其島に着いたのは午后二時頃でありました、それから三時には三笠艦に慰問に參つた、此慰問のことは新聞紙上に出て居りますが、此際には東郷司令長官に逢つて先づ色々御苦勞の事を申して禮を述べました、其時に三鞭酒の御馳走があつて共に陛下の萬歳を唱へた、其際に私共議員は一同に元との華頂宮殿下即ち今の伏見若宮殿下がお出でになつたので拜謁を致しました不肖正次は嘗て維也納に居る時に御伴をしたことがあつた、それでお言辭をかけられた誠に有難いことゝ思ひました、此船に付ては御話をしなければなりませぬ、(此時寫眞を示す)此處に司令塔があります、此處には彈丸が命中つて居ります、其事を申しますが此船の鐵の柱が二本裂けて居る、敵の砲彈が當つて檣を倒つたのみならずそれが下に行つて此デッキを突抜いたのであります、其時には澤山の死傷が出來たのであります、此處に大きい大砲がある、此大砲を預かつてお出てになるのは伏見宮樣であります、始め戰爭の時に殿下の上には皆砲彈の碎けたのが落ちたのであります

が、幸ひに御怪我が無かつたのであります、皆さん如何でありますか、宮様方が斯う云ふ所で御辛勞をなすつて居るのであります、實に恐縮の至りではありませんか、私は其狀を能く聽いて又當日の工合等を見て殿下が斯う云ふ所で十分の御働きを遊ばすと云ふことを此間印刷局でも御話を致しましたが、之に付ては後て十分致しますが、さう云ふことを伺つて吾々は船に歸りました、さうすると四時に出帆を致しました、さうして海洋島を横目に見て長崎の方へ歸つたのであります、長崎に歸る前にも佐世保に行つた、私共が長崎に着いて翌朝長崎を立つたのであります、此立つ時に露艦が現はれたと云ふことてあります、私の船が長崎を出て大島沖を廻つて東京に歸る積りであつた、さうすると露西亞のグロンボイ等に撃たれるかも知れぬと云ふて一時前に電報が來たので、實に吾々は命捨ひをしたのてあります、それで神戸に廻つて歸りました。

此間に私が最も感じたと云ふことを御話しなければなりませぬ、此四十日の間歩きましたのが六月十二日から横須賀を出て七月二十二日には歸りましたが、海上の里數は二千七百六十四海里であります、而して貴嬢方に御土産として最も申さなければならぬのは何であるかと云ふと、船に於ての衞生であります、船に於ての衞生は立派に行はれて居ります、殆ど船には病人がない、船の食物などは是は臺所を有つて居りますから便利であります、病人があれば直ぐに病院船に送るやうになつて居る、併ながら今御目に懸ける此水雷艇に乘つて居る人達は非常に豪い者でございます、(此時寫眞を示す)數日間風呂に這入ることも出來ず歩くにも跼まなければならぬやうな船の中て僅かの人が乘つて働いて居るのであります、此水雷艇の有樣を御覽になつて如何にも豪いもんであると云ふことが思ひやられる、其中で能く無事に戰爭が出來ると云ふ考を起さなければなりませぬ、私共が參りました際に朝日艦と三笠艦が來た時に吾々が行つて慰問をした時に大變喜んだの

です、それて吾々の健康を祈られたが、私は實に此船が日本の爲に働き甚しき困難辛苦を致されて居ると云ふことを認めて居つた、殊に顏の色は眞黑になり、恰も印度人の如くて、白い衣服は殆ど黑鼠の色になつて居る、此暑い時に實に能く困難に堪えて戰爭をして居るのは吾々が察するに餘りあることであります、私共は過日此演說をしたことがあるが、斯の如き所の船の中で殿下が非常に御勇壯に戰爭をなされる、どうか御怪我が無ければ宜いと云ふことを言つて居つたが、遂に先月の海戰で御怪我を爲すつた、即ち三十珊の砲彈が此大砲に當つたのであります、其時に十六人の負傷人があつて、殿下も其一人でございます、新聞にも出て居つたが衣服などはあれ程に裂ける位でありました、斯の如き戰爭に於て殿下方が斯く御勇戰遊ばさるゝは實に恐多いことてございます、又陸戰の模樣を見ましても實に困難な次第でございます、殊に陸に於ては衞生のことが十分に行はれない、或は惡水も飮まなければならない、又食物にも困難して十數日間寢ずに鹽、堅麵包或は乾飯などを舐めて戰爭をするのであります、それで私共は是から寒氣に向ふ時でありまするゆへ、國民後援會なるものがあつて、毛布か何かを送ると云ふやうな志がある、私は彼の地に出て居る軍隊が是から先受ける所の滿洲の寒氣は如何であらうかと思ひやつて居ります實に十分之を助ける考が國民に於てなければなりませぬ、軍隊に於ての困難なることはナカ／＼多い、願くは同情を得て、我出征軍人が病氣で終らないやうにしたいのでございます、私は日記通り斯の如く御話をすると宜いが、御承知の通り時間が少ないから十分なる御話をすることが出來なかつたのは最も遺憾に存ずるのでございます、殿下及皆さん方が私の詰らぬ御話を御清聽になつたことを感謝する次第でございます。

（完）

寄書

醫師は畫學の如し

竹外 竹中成憲君

畫の巧拙は意匠、濃淡の外、繪具配置の如何に關す而して繪具に上等、下等ありて其品位に因り畫を上下するものなり光琳の如き特に繪具を吝まざりしを以て聞ゆ、藥品亦然り名稱同一にして品質頗る異るものあり。畫に在て繪具を吟味せざるべからざると同じく醫術に於ては藥品を精選せざるべからず、然れども精良なる藥品のみを以て未だ醫術の神妙を期すべからざるは尙、畫の色素意外に意匠、淡濃を要するが如し、意匠は即ち診斷にして濃淡は分量なり斯く考へ來りて畫に於ける繪具、病に於ける藥品共に結果の巧拙は其運轉の工合に在る事を思はゞ醫術と畫學は相似る所多しとす。

繪具につき思ひ起す所あり蜀山人(文政六年歿す)一日文晁(天保十二年歿す)を訪ふ文晁の書齋、床の間に美麗なる川骨(かうほね、骨蓬、萍蓬草)を生く花色、黃色たるべきに反し紅なり山人之を奇とし強て乞ふて雨路之を自庵に持歸り將に之を再び生けむとせるに豈圖らむ紅色たるべき川骨は普通の如く黃色なり之を熟視すれば途上雨の爲め繪具の脫落せるものにして繪具を以て操りたる痕跡歷々たり茲に於て山人左の句を書して之を文晁に致せり。

文晁の眞赤な噓と知りたれば
「かうほね」折て貰ふまいもの

醫の所謂玄關を飾り診察所に無用の器具を陳列するは敢て病者に害なきも藥品の淡なるを擇び藥室に特に美麗なる液を作りて來者に示すが如きは或は文晁の川骨に類するものあらむ乎予の筆も亦文晁と同じく遂に枝葉に入る多罪。

天狗道人曰く「昔太田見良なる人其志行清潔にして

藥を用ゆる必ず上品を選んで價を問ふ事なし其言に云くもし時の價を知れば自ら吝の心生じ調劑の間其價貴きものは減用するに至る吾あさましきことと故に愼て問はずと」いふ云々。

（終）

家庭看護法（前號の續）

醫學博士　三宅　秀君

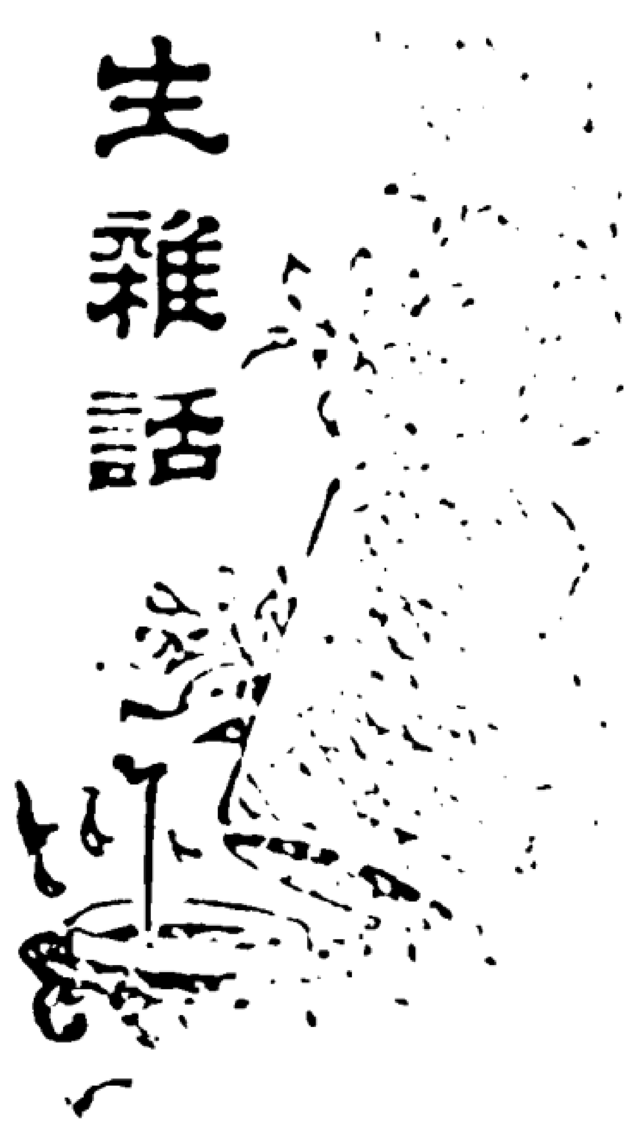
それからもう一つ日本で外國と違つて餘程不便なことは、交通の道路が充分に開けて居りませぬのと、今申した運送の車の宜いのがありませぬから、養生者には假令極く適當の處がありましても人力車は通はない爲に是非駕籠で行かねばならぬやうな所が諸方にあるのでございます、馬か駕籠ならば行けるけれども人力車では養生所まで行けないと云ふこともあります、強いて人力車で行かうとすると綱曳後押で三人位で無理に人力車を押上げましても、路が嶮岨でゴロ／＼石などが立つて居るやうな所でありますと人力車に乘つて行つたために病氣が惡くなります、行着いた先で養生したら快くなるか知れませぬけれども行くまでの道路の惡いために却つて病が重る樣では養生者の爲にはとんだ好い場所でありましても連れて行く道路の困難なのは遺憾千萬な譯であります、斯う云ふ所は未だ至る處に見掛けます、殊に婦人の子宮病などのありまする病人を此樣な道路の惡い所を強て人力車に乘せて十里も二十里も歩かせるやうなことをしまするも病氣の爲には却つて旅をしない方が宜い位であります、此等も宜しく斟酌しなければなりませぬ、病人を載せて行く車や駕籠も改良するが必要でありますし道路も改良しなければならぬ必要があります、

それから病人に依りましては、瘋癲などのやうな病人或は腦の病氣などで左程に暴れない靜かな病人でありましても、高い山の側傍へに崖の上や谷に臨んだ側を歩いて居ると下を覗いて不意と飛込んで死ぬ氣の起るやうなことがあります、斯う云ふ場合には

傍に附添ひ居る看病人が餘程心配であります、瘋癲病者などを伴つて旅行をしやうと思ふ時分には、海邊だの或は深い谷の岨を歩いて居りまする時分には平日格別精神に異狀を認めない瘋癲病者でも突然に飛込んで死ぬ氣になつたりすることがある、此等は病氣の爲にさう云ふことになるのでありますから之に付いて行く人は充分注意致さなければなりませぬ、全體ならば其場合に醫師の方で萬端注意するのでありますが、若し醫師の注意が足らなかつたならば私共の申すことを能く聽いて覺へて置いて頂かなければなりませぬ、「それから又長途の道中でありますと、毎日好い天氣ばかり續くものでありませぬから長い旅を致して居ります時分には必ず雨風に遭ふことがあります、それが爲に外の病氣を惹起すやうなこともありませす、旅行に出やうと云ふ時分には胃病か何かあつて、「どうも胃病で宜しくない、出養生でもして見やうか」と言つて出た者が其途中で雨風に遭つたゝめに急に肋膜炎になつたとか肺の病氣が出たとか云ふことがありますから、長い旅をします時分には雨雪などの難は到底免れ難いのでありますから或は雨雪を冒して旅行し又旅店に滯留して時間を待つとか總て病人を伴れて旅行をする人は餘程其邊も斟酌しなければなりませぬ、

此話の了りまするのはなかく長くなりますから今日は變な區切の所でありますけれどももう時間が參りましたから此邊で切つて置きます、

衛生雜話



醫學士　石原喜久太郎

◉結核病の統計

人類社會の大敵である處の結核病が如何なる範圍に、如何なる狀態で、如何なる程度に、ひろがッてゐるかと云ふ事を知るには、よき統計を得ねばよく

わかりますまい、然るに其統計と云ふものが仲々六ケ敷いことでありまして、充分に精密、明確、細大不漏と云ふようなのは容易に得難い次第であります若し斯樣なるものが結核に就いて得らるゝならば、結核病の豫防なり撲滅なりの參考となり、一般人生に益する點も多かる可きことゝ信じます、

近頃歐羅巴の衞生學雜誌を見ましたのに、近年の歐羅巴の結核病に關してかなり調べの屆いた統計が揭げてありました、しかしながら、まだ〳〵充分冀望を滿足する程のものではありません、其内に就きまして、皆さまの御承知になッてよからうと考えましたふしを二三拔き書き致しまして茲に御覽を願ふ事となりました、

●英國の結核病

グレートブリテン及アイルランドでは、どうかと申しますに、就中イングランドとウエールス二國は調査がよく屆いてあるも、スコットランドとアイルランドとはそれ程迄には精細でない、しかし、一千八百九十一年から一千九百年（明治廿四年より明治三十三年迄）に至る間の十ケ年間の平均で、一萬人の住民に就き毎年肺結核及他の臟器の結核によりて死亡したる者の數は

	肺結核	他の臟器の結核	合計
イングランド	一三、九	六、二	二〇、一
スコットランド	一七、二	六、九	二四、一
アイルランド	二一、三	六、五	二七、八

即ちイングランドで云へば、住民一萬人中、肺の結核で死ぬる者が十三人と、九、それから他の臟器の結核(例へば腸結核とか、腎臟結核とかの類)が六人と、二、それで、結核病の爲めに死ぬる者が一萬中の住民中總計二十人許りとなる勘定である次に、

◉佛國

巴里では、千八百九十六年から千九百年迄四年間の平均で、住民一萬人に就き肺結核にて死んだ者が每年四十人、其他の結核死亡者が約十人であります、又佛國の都市を通じては、どんな風であるかと云ふに、千八百九十三年から千八百九十八年迄の六ケ年間の

平均て、住民一萬人につき毎年

肺結核	二五、三
腦膜結核	三、一
其他の臟器の結核	四、九
合計	三三、三

即ち毎年住民一萬人中て結核性の病氣に罹りて死亡する者が三十三人と、三ある統計になるのです、

◉獨逸

全獨逸國では、千八百九十二年から千九百年迄九ヶ年間の平均て、住民一萬人につき結核性の病氣て死亡した者は毎年

肺結核	二二、一
他の臟器の結核	一、九
合計	二四、〇

即ち一萬人の住民中結核病と名の付く病氣によりて斃れた者が毎年二十四人あることゝなります、獨逸の首府伯林では千八百九十八年と千九百年の兩年にて

	千八百九十八年	千九百年
肺結核	三千七百七人	四千四百八十二人
他の臟器の結核	四百三人	四百三十七人
合計	四千百十一人	四千九百十九人

◉露國

露國の調査は行き渡ッてゐないのです、甚だ不充分であります、其內、わかッてゐるだけを掲げましやうならば、都市の二三だけですが、住民一萬人中て結核病死亡者は毎年

	肺結核	他の臟器の結核	合計
モスコー（千八百九十四年より千八百九十七年に至る）	三四、五	四、二	三八、七
オデッサ（千八百七十四年より千八百九十一年に至る）	三三、三	—	—
ペーテルスブルグ（千八百九十九年）	三〇、五	七、八	三八、三

となッてあります

◉結核死亡と年齢との關係

肺結核の死亡者百名につき年齢別に調べてあるのを見ますと

國名	年次	年齢 〇—一	一—一五	一五—六〇	六〇以上
イングランド	千九百年	一、〇	六、〇	八六、二	六、八

スコツトランド	千八百九十一年より千九百年に至る	一、〇	九、一	六四、九	二五、〇
アイルランド	千九百年	〇、四	七、七	八七、六	四、三
獨逸	千八百九十九年より千九百年に至る	二、九	八、八	五四、八	三三、五

右の表によりますれば千九百年に、イングランドでは、百名の肺結核死亡者中、年齢一年未滿の者は一人、一年乃至十五年の者は六人、十五年乃至六十年の者には八十六人、二、それから六十年以上の者には六、八人の割合で死んでゐると云ふことになッて居ります

右のほか統計に就きましては色々こみ入りた點もありますが、深入りすると通俗の範圍を越して面白くありませぬから唯ざッと書き列ねた儘で之は筆をとめましやう惜いことには說明が六ケ敷い爲めに是以上のことを掲げ難いと云ふことと、それから日本の調査を併せ載せぬと云ふことの二ッでありますそれはよろしく御勘辨を願ひ升、



婦人と子供

醫學士　唐澤光德君

●玩具の話

小兒の殆んど日用品とも云ふべき玩具—をもちやは衛生上の或る點に於ては、飮食物同樣の注意を要するものでござります、

一體玩具—をもちやは小兒が睡眠してならない時間の大半はこの玩具を玩んで遊んで居ると云ひましていゝ位でござりますから、其間にはこの玩具をなめる事もござりまするし、また之によつて非常な怪我などを致す事もござります、其他心理學上から申しましても小兒の精神上に影響する作用も少くはござりますまい、

一般に我國の玩具には數年前迄は非常に有害な色素が使はれてあつたので、隨分危險なものでござりましたが、政府でも此點に向つて、非常に注意されて

明治三十三年に内務省から有害性着色料取締規則と云ふのを發布せられましてからは、どし／＼有害な繪畵を使用してゐる玩具を罰しました爲に、兩三日前私が親友の、東京玩具商組合の頭取をして居る倉持長吉君から聞きました處では、輓近は非常な粗製物でなければ殆んど有害でないと云ふ塲合に立ち到つたそうでござりますと

勿論玩具も此開明の世に會ひまして、諸物改良の風潮に從ふべきは、理の然るべき處古代行はれて居りました玩具が當時行はれてゐないものが少くない、例へば木で作つた天神樣の御宮――中にはあの天神大黒、燈籠、隨神、矢大臣、鳥居、あま犬、こま犬などの入つてゐたものや、天神樣の御かけじなども一時は非常に流行して居りましたが、今は全く地を拂つて殆んど見かけませぬ、其他狸のばかん／＼、木にて作りたる椈丸、とんだりはねたり、ビヤボン、泥細工の馬、狐などもすたれて、「ブリキ」製の軍艦、汽車、「セルロイド」のがら／＼が流行すると云ふ風になつてまゐりました、また

教育の思想が一面に發達してまゐりましたにつれて其意味をも玩具に持たせまして、近頃になつてから、漸次に世に賣り弘めされて來たのは、つみ木と繪合せなどが其適例でござります、つみ木の方は家屋、橋、鳥居、塀、宮などの形を作るのに供され、種々の圖を題として、小兒をして自ら其工夫を致させるもの、繪合せもまた同じ樣の性質を具へたもので、地理、歴史、風俗などの知識を娛樂の傍らに自ら發達させる利益がござります、從つて是等は幼稚園で其爲に盛んに使用せられて居りまするが、衞生上から申しましても亦全く無害な、奬勵すべきものでござります。

今玩具の衞生上に於ける御注意を二三申し上げますると昔しからずつと行はれて來て居る玩具の内で、今も尚よく用ひられて居るのは木細工の御しやぶりてこれは所によるとねむり子ともまたぐり／＼とも申します、之れは小兒の哺乳の代はりに使はれるも

のて、當時は「ゴム」製の乳首を用ゆる方も多くござりますが、まだなか〳〵に使用せられて居ります、また其形ちも漸次に進歩してまゐつて、其口の處は「ゴム」になつて居り、其一方の端にはがら〳〵がついて居るのもあり、又は「セルロイド」で作られたのもござります、其色は概ね白色で彩色をしてないが、時によると其握りなどに赤や紫の色を附けたのもござりました、此翫具も七八年前は有害であるものを使はれてありました、今用ゐてあるのは主に食料品で殆んど無害になつたそうでござります。

非常に有害な色素を含んで居つたのは張子の首振りの虎これは虎の首を黄色に塗る爲に石黄（ピクリン酸）を含んで居りました爲に衞生上有害の品と認められて、今は「ヲウラミン」（酸化亞鉛に「ヲウラミン」を混ず）を用ゆる樣になり、幾分か衞生上の危險を去りましたが、其體裁があまりよろしくない、云ひ換ゆれば廿世紀流でない爲にすたれてしまひました、しかし黄色の色素と云ふのは多くは砒素や「ピクリン」酸などからなつたのが多くありますから餘程信用し得るのでなければ黄色に塗られた品物は小さき小兒には御與へにならない方がよからうと思はれます。

ねりもの類　ねりもの類と云ふのは桐の粉を「ふのり」で堅め、之にごふんをかけて、其上をまた彩色した、犬、馬、金太郎、鯉など種々の獸類魚類の形を作つたので、是等も其下等品になると從前はキ黄スカレット、綠靑などが其翫具の廉なる爲に使用せられて居りましたが、其取締規則の發布後は非常に改良せられた有害の翫具になつたそうですが、私どもの方から云はせると、此種類の玩具は少くとも二三歳以内の小兒には用ひさせたくない、食物の消毒すらやかましく申して居る時代の小兒に、この樣な桐の粉や、ふのりなどを玩はせ嘗めさせるのは衞生上至極危險だと考へられまする、

反之、危險が全くなく、また容易に清淨にする利益を持つて居りまするのは、瀬戸物細工の玩具で、五六

年前から名古屋から賣り出されました、之は昔京都の清水で、種々の人形、魚類、獣類など製作して居りましたが、今は名古屋の瀬戸でも作る様になりました、之は本焼でござりますから、なめてもはげる憂ひはござりませぬ、只強いて缺點を申しますと、其目方と重いのと、冷いのとが缺點で、之を物に打つけまするとか傷がつく恐れ丈はござりまするが、まづ之等は無害と認めてよろしゆうござりましよう。

此他古來我國に於て行はれゐる人形之は別段の改良は認めませぬが、今日は昔しの様に裸體のまゝではあまりござりませぬ、また頭髪も島田、唐人髷、唐子又は稚兒髷以外に束髪、さげなども出來、また近時蝦茶式部が流行してまゐつたのにつれて、袴や被布をつけたのも出來、また女禮式などにつれて漸次社會の風俗及禮義に合ふ様に進んでまゐりました、之も衞生上からは從來種々批難のあつた品物で、やれ人形の衣服には古着を使用するの、また其胴と足との處などをつなぐさらし木綿には囚人の古着を洗つて使用するなどと云ふ事もござりましたが、充分調査致しました所では、今はかやうの事はない様で全く新らしき品を使用致して居ります、只價の安い粗末な人形に着せてある衣服、たとへば金襴まがいの衣服などはあまりに信用の出來る品ではござりません。

以上は主に玩具に使用せられてある繪具等の點から其衞生上の御注意を申し上げたのに過ぎませぬが、此外直接に身體に傷害を與へる、がらす細工や玩具を入れてある硝子製の箱(臺所道具、おはじき)、及粗末なる錻力細工なども充分注意すべき品でござります、

まだこの外一つ〳〵の玩具に就きましても取調べては居りましたが、あまりくど〳〵しくなりますから略しまして、一般の玩具の内て、さらばどの様な品が二三歳迄の小兒に與へてもさしつかへの少いものかと申しますれば、私一己丈の考へては「セルロイド」製のをしやぶり、がら〳〵奉書細工の動物、瀬

戸物細工など、其彩色の殊に簡單なものを與へらるゝのがよろしからうと考へます、尚みな樣も玩具を御與へになる際に充分諸般の方面に向つて危險のない、出來得べき丈無害のものを撰ばれましてもし其小兒が一年以內の乳兒でござりまするならば常に其玩具を清潔に洗はせて清潔なるものを持たせらるゝ樣に希望致します、



質疑欄

●●●●質問注意　質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又答解に遲速あるは發載順に都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみをわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御通知の事●本號の雜誌に發表する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす●総て急ぎの分は回答せず

問　クレオソートは強壯藥として常に用ゐて差支なく候や若し用ゐるとせば如何なる方法に從ひて可なるや御尋ね申上候

質問者　倉貝m生

答　「クレオソート」を強壯藥として吞んでは如何と云ふに極少量宛より始むれば害なし否むしろ胃の消化を助く、始めには膠嚢と云つて藥店で販賣する膠製て一寸見れば硝子のやうな、小さくて、兩方から嵌るやうになつてゐる嚢狀のものがある、それに一滴位を容れて食事中に吞む、膠嚢にも番號によりて大小あり始めは少さいのを用ふ、滴數も段々に增加する、それて初め二三日は三度の食事中一食、小膠嚢に「クレオソート」一滴位、其次二三日は每二食に同量其次の二三日には三食每に同量其次の一週間には每食二滴位吞む、それて、續けてよし、しかし肺病の人ならば尚ほ段々に增量すれども、唯強壯藥として吞むならば大量多く吞むには及ぶまじ、是以上のことは醫師につき診察を受けて詳細をきくを必要とす、

問　皮膚を美麗ならしむるベルツ水の製法私は存

質問者　岐阜　馬淵秀子

ませぬ故御教授願度且其液は白粉と並用して差支無之候や

答　ベルツ水製法の事は是迄何度となく本誌に掲載して居りますが皆樣から期節になると御尋ねゆへ玆に又〻其製法も申上げましやう

ベルツ水處方

苛性加里	〇、五乃至一、〇
グリスリン	一〇、〇
亜爾個保兒	一〇、〇
水	八〇、〇

ベルガモツト油又は他の香水二三滴

お白粉と並用するも差支なしそれには初めにベルツ水を塗り數分時間もたつた後手拭にてよく拭き次にお白粉を塗るべし

問　質問者　東京青山一會員

鐵劑は强壯劑と聞き及び候へども如何なる理由に候や又鐵粉を少々づゝ呑み候てもよろしく候や伺上候

答　鐵劑は血液の主要成分である赤血球を補はんが爲めに用ふ之れは赤血球の内に鐵分を含有しているからである併し鐵粉は身體に吸收せられ難いものなればやはり鐵劑の方がよろしい鐵劑を呑むときには茶や珈琲の類を呑まぬがよろし要するに鐵劑は貧血性の人などに尤も有効のものなり

問　質問者　神奈川　柳下まつ子

私近隣に生れて間もなく丹毒にて倒るゝ赤兒多く候が右は如何なる原因に候や又丹毒初期の特徴豫防及療法等伺上候又右病氣は不治のものに候や傳染するものにや以て伺上候

答　丹毒は傳染病にして、恐るべきものなり、丹毒菌と云ふ黴菌によッて傳染を來すものなり、丹毒病者には一切近寄るべからず、其の用ひたる衣服手拭其他は消毒せざれば用ふべからず、傳染は主に皮膚の傷から來る、（目に見ゆる程の大きい傷でなくとも）そうして其の毒の這入ッた部分は赤くなり筋を引き、脹れる、それが段々ひろがる、不治の病氣と

は限らぬが、初めにまだ、部分の小さい時に手當すればよし、ひろがッてからは仲々治療困難なり

問　私の友人手足に男子の如く毛長く見るも苦しきまでに御座い升が毛をぬき去りて生じませぬ方法はございませぬか又毛を拔くにいたくなき方法無之候や

質問者　南部の一會員

答　是は天性てそれを甘くなほすことは六ケ敷いてす多少の方法はありますが素人には出來ませぬ元來毛と云ふものは毛根があッて其毛根が榮養を受けて發育するものであるから毛を生やさぬ樣にするには毛の根をたやしてしまわねばならぬ譯ですから皮膚病專門にかゝるとを勸告致します毛を拔くのにはいたくない方法もありますが是は劇藥で素人には危險て迚も藥屋ては賣りませぬよしや其藥を塗ッて毛を拔いた處て剃刀てスッたよりは遅いてすが又々發生して來ますから仕方がありませぬ、

質問者　讃岐一會員

問　醫師の診斷試驗により痰の中に結核黴菌が澤山居りしとの事併し當人は每日牛乳三合と三度の食事もして居り座敷の内を步行して居り候が結核黴菌居れば助からぬものにや養生法等伺上候又足に一月以來腫れ物出來大きくも小さくもならず候

答　略痰中に結核菌が居れば其人は肺結核病にかかッてゐることは確かですが、しかし肺病が皆助からぬと云ふことは無いです、立派になほる例は隨分あります、養生法は其人の容體如何によッて種々見當も違へますが、季候のよき土地に轉地し滋養分に富めるものを食し、常に醫師の監督を受けて必要なる服藥をなす等は誰れにも適當することです、足の事は見ねばわかりません、

質問者　山形　阿部　燕

問　鼻及口の周圍に平生二三ケ所に少さき腫物出來模樣は一厘錢大の如く薄赤色になり後中央部に粟粒大となり…：治するや又脇に發生す何に

か塗布藥無く候や自分の習慣は睡眠中布團に頭を入るゝが爲かと存じ候へども伺上候

答　是は一種の皮膚病で恐らくは頑癬たむしの類なるべし睡眠中夜具に頭を入るゝ爲めてはありません併し頭などを夜具に入れることは衞生上よくないばかりでなく頑癬は温まるとかゆくなる此病ひは黴菌によりて生ずるもので極めて頑固なものである「クリサロビン」と云ふ藥などは効能があるが是れは劇藥なれば皮膚病專門の醫師に就きて病の廣ろがらぬ内に治療せらるべし



名家談片

●凍傷の豫防法

日清役に於て凍傷患者の多かりし事は先號の紙上に記したるとありしが更に今回の役に至りては軍隊の多くは人も知る如く日清役の時より遙か北方に駐屯し居る事なれば各將卒の寒氣に苦しめらるゝも亦一入劇しかるべし左に某陸軍軍醫が日清役の經驗に依り凍傷豫防法に就て語る處を掲げ聊か出征軍人の參考に供すべし

一　草鞋を穿用するものは凍傷に罹り易し依つて靴を穿つべし但し足具は足關節以上に達する革製半長靴にして不透水性ならざるべからず又足具の内容は足に毛織襪二枚及び眞綿一枚を穿つも緊縛に過ぎざるもの約足の太さに比し一文半以上の餘裕を與ふべし

二　凍傷の第二の誘因は寒威に抗抵するの力即ち榮養狀態の良否に依り傷狀の輕重を異にするものなれば糧食係り官は滋養物を增給し其榮養を佳良ならしむるにあり

三　凍傷豫防は各自の注意にも大關係を有す日清役の經驗に依れば個人的豫防の注意密なるものは之れに罹りたるもの少く例令之あるも傷狀輕し之れに反して注意粗なるものは高度の凍傷にかゝりたるもの多し下士兵卒の軍役夫より少きは全く注意の精粗に

依るものなり故に各個人は深く其邊に留意すべし

四　寒氣尙ほまた強劇ならず河流の氷層薄弱にして人重の載するに足らず彼此を徒渉するに當り河氷破壞して足を水中に投ずことあり斯くして濕潤したる足具は空氣の低溫に逢ひ忽ち足と共に氷着し凍傷を起す事あり現に日淸役に第五師團が多數の凍傷を起したるは全く以上の如き期に鴨河を渡りたるに依るものなり

五　衣服假令毛織なりとも組織粗大なるものは防寒の力強からず故にフランネル綿フランネル襦袢の如き組織密なる襯衣袴下と體溫質の靴下を用ひるを最上とす

六　寒を防ぐは啻に衣服に由るのみならず家屋其効最も多し家屋を第二の衣服と稱するは此故なり蒙古天幕は其防寒に大効あれども俄に之を得ること難し故に在來のバラックに防寒の修繕を加へ在來の天幕に暖幕裝置を試むるも一利なるべし

七　寒時は肉類脂類の量を增し茶の給與を增加し酒類の濫用を戒むべし

次に此程海軍省が出征軍に達したる凍傷豫防法を聞くに左の如し

一　耳鼻手足等は最も凍冱にかゝり易き故に外氣中に出るに當つては常に頭巾耳覆手袋足袋等を用ひ此等の部を溫包せざるべからず手袋靴下には厚き毛編製を良とす靴は革製よりも寧ろ藁靴を用ふべし耳は帽垂又は特別製の耳覆を用ふるも可なり鼻は襟卷にて被覆すべし短時寒氣に暴さるゝ時と雖も輕忽に此等の注意を怠るべからず眼鏡其他金屬製のものを皮膚に直接せしむる必要あるときは豫め摩擦して發溫せしゆ後用ふべし又手足を濕すときは凍冱にかゝり易きを以て直に拭ひて乾燥せしめ濕潤せる手袋靴下靴等は直に脫すべし血行障害を來たし知覺鈍麻する時は其部を能く摩擦して發溫せしむべし溫度出づる時は溫度に浸し或は火に當つるも妨なり尤も將に凍んとする部を溫湯に浸し或は火に當つるが如き事は不可なり

二　寒氣中に長く暴露する時は疲勞の感強く覺知鈍麻となり睡眠を催し遂に昏睡して死する事あり殊に飲酒するときは此危險にかゝり易し之れを以て寒氣に暴露するときには全身を防寒被服にて温包するは勿論勉めて運動を營み睡氣を撹破すべし此際睡眠せは凍死の危險あり又決して飲酒して一時の所温を圖るべからず

三　北海道其他寒氣に越年せし邦人には水腫症即ち濕性脚氣を發する實例乏しからず是れ糧食の不良と運動の不足に因るものにして善良の糧食を備へて日常の攝生に注意する時は此患ひなし即ち米食の多量を避け米六麥四の麥飯を常食するか或は一日二食は乾麵麭を食し一日の米量二合を越えざるときは豫防の効更に著し肉類にては豚肉を第一とす是れ寒地にては多量の脂肪を要すればなり

四　運動は一日の日課として怠るべからず終日屏居すれば食機衰へ榮養を害し水腫病を起すの虞あれば屋内にても適宜運動を怠るべからず

五　飲料として茶を最上とす室外に出づる前に飲酒すべからざるは勿論酒は温體を放散するを以て寒地にては濫りに用ふべきものにあらず

六　室内を温暖ならしむるにはストーブを選用すべし火鉢又は爐を用ひざるを良とす

七　沍寒猛烈なる夜中の當直は各自の見張時限を短縮すべし各自懷爐を携帶せば寒を凌ぐの帮助たるべし

八　室内より屋外に出て俄然強烈の寒氣に曝さるゝは避くべし室外に出づるには手足耳鼻と等しく氣道孔たる鼻孔及び口をば能く被覆し直接寒氣の吸入を避くべし云々(時事)

中外彙報

銃砲創治療方針
(陸軍當局の實驗談)

我陸軍衛生部に於ける銃砲創の治療方針は實戰の經

驗と學術の進歩とを參照して立案せるものなるが世には往々之に對し無稽の言をなし殊に繃帶交換をなさゞるを目して治療の不親切當局の怠慢を喋々する者あるは寔に歎はしきことなりとす是れ畢竟軍隊外科學の何ものたるを知らざる者の謂ふ所に過ぎずして敢て異むに足らずと雖も之が爲め世人に疑惑を生ぜしめ出征軍人の家族に不安の念を抱かしむるに至りては之を默視するに忍びざるを以て特に銃砲創手當法に關し必要の說明を述べ以て世人の惑を解かんとす

抑も銃砲創は一般に防腐的損傷と看做すことを得べく隨て創部の洗滌は寧ろ有害の場合多きを以て我陸軍衛生部に於ては夙に之を廢止し極力乾燥を圖り成るべく速に保護繃帶を施すの方針を執れり而して創傷不幸にして化膿するか若くは創液の分泌甚だしく多量なるか又は繃帶の弛緩脫離等の場合にあらざれば繃帶交換は殆んど其要なきものにして即ち簡單なる銃砲創の第一繃帶下に治療することは決して珍らしきことに非らず又彼の骨折者等の繃帶交換の如きは所謂安保固定の原則に背逆するものにして成るべく之を避けざるべからざるや論を俟たず若夫れ繃帶交換を必ずしも必要とせざる例證としては廿七八年役以降太だ多數の實例あり又夫の露土役に於けるベルヒマンの實驗例中第一繃帶後四ヶ月の間一回の交換をも施さずして確實に治癒したるものあり而も其舊き繃帶の中より指頭大の骨片を得たることの事實の如き僉な以て其證左となすに足る

廿七八年役に於ては約ねベルヒマンの法に據りて處置したりと雖も創部を洗滌することは禁止するまでには至らざりしを以て隨分洗滌したる形跡あり前記洗滌の理由の主なるものは銃砲創を受くる際衣服等の不潔物創口に附着若くは混入するを避くるの目的たりしもの丶如し然るに晩近學者の試驗に依れば彈丸にも空氣中にも將た衣片中にも有毒性細菌の無きこと常なるを認證するに至りたり要するに我部內に於ける銃砲創の治療法は多數の實驗と深遠なる學理

とに基きて之を行ふものにして縫ひ其一小業務たる創口の洗滌又は繃帶の交換と雖も必要の場合にあらざれば之を施行せざることに一定したるものとす舉莚するに患者の願望を容れ又は體面を裝ふと稱して濫に洗滌、交換等のことをなすは斷じて之を許さゞる所以なり若しそれ創部の洗滌及び繃帶の交換を以て患者の慰藉法と稽へ又は之を行はざるを以て不親切の所爲と思料するが如きものは宜しく往時の治術と對照して今回に於ける患者治癒の成績好良なるを視ば必ずや釋然として大に發明慰安する所あるべきを信ず

▲既往十數年に於ける赤痢患者　本年は幸ひ今日は疫軍の未だ大舉せざれどもイツ何時襲來の不幸を見るも計り難ければ所謂勝ッて兜の緒をしむるこそ緊要なれ今廿年以來の赤痢患者の統計を擧げて其何月が尤も多く發生するかの注意る惹かんとす



赤痢病統計

年月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
明治廿年	:	:	:	:	:	:	:	一	一八	一七	一五	:
同廿二年	一	一	:	:	一	:	二	四	七	六	一	:
同廿一年	:	:	:	:	:	:	五	一九	四三	[illegible]	:	:
同廿三年	一	:	:	:	:	:	二	二	八	一〇	一	一
同廿四年	:	:	:	:	一	:	二	一七	一九	一五	三	一
同廿五年	:	:	:	一	一	二	四	一一	四	五四	一一	二
同廿六年	:	二	二	:	:	一	一一	三〇一	[illegible]	[illegible]	一〇二	三
同廿七年	五	一	二	:	一	一五	二六	三六	[illegible]	八九	四三	四
同廿八年	一	三	一	:	八	五	一五	二二	二六	一六	八	五
同廿九年	二	一	一	:	四	二	四	八	二八	二七	六	三
同三十年	:	:	一	四	三	四	九	二六	八	一三	六	四
同卅一年	一	一	一	:	一	三	一四	三	七〇	二六	一五	二
同卅二年	:	:	:	一	一	:	五	[illegible]	[illegible]	一三	五	四
同卅三年	:	一	一	一	二	八	一七	二七	[illegible]	一一	四	:
同卅四年	一	一	二	一	:	二	七	三	一〇	一一	三	二
同卅五年	二	一	四	:	六	三	二	一六	二〇	一一	六	一
同卅六年	一	二	:	一	一	六	九	一七	三〇	一三	五	二

▲防腐劑取締と地方廳　去月一日より施行せる飲食物防腐劑取締規則は過般來各地方廳に於ても夫れ〴〵酒類檢査の實地練習を爲さしめ公共衛生保護の

ため大に同規則を勵行する方針なるが萬一不正酒を發見する時は毫も假借せず三十三年二月發布の法律第十五號に基き其の物品の製造採取販賣授與若くは使用を禁止し又た其の營業の禁止若しくは停止を命ずるは勿論物品の所有者をして之を廢棄せしむるか又は執行者自から廢棄を行ふ外更らに二十五圓以下の罰金をも附加して之れが制裁を加へ以て衛生上の危害を防止する筈なりと

▲身體檢査規程の改正　女學生身體檢査に就ては種々忌はしき風說も行はれしことも度々なりしが文部大臣が省令第十八號を以て檢査規程中の改正をなしたり即ち

第一條第一項を改め學生生徒の身體檢査は每年四月に於て之を施行すること從來の如く每年二回の報告は却て煩雜なる手數を要するのみならず大體に於て學生生徒の身體の狀況を知るは必ずしも一年二回の檢査を要せざるが故に文部省に報告すべきものは各學校に於て必要に應じ檢査せしむることゝなしたり

第四條第二項を削り第五條第一項第四號を左の如く改む

從來の規定にては身體檢査のとき體重を測るには著衣の儘測定せざるを可とすとの規程なりし爲め時に或は其文字に拘泥して其活用を誤るものなきにあらざるが故に改正規程は之を削りて男女の別により適當の處置をなさしめんとし

體重は著衣の儘測定したるときは其の著衣の重量を全重量より除去せしむることゝなしたり

第七條第二項を改め

地方長官は前項の報告を受けたるときは之を取纒め其年六月限り文部大臣に報告すべし云々

▲注意すべき狂茄子の中毒　麴町永田町二丁目北川さい(三十)は去る一日の夜持病の喘息激しく起りしより豫て知人より喘息の特效藥として貰ひ置きし狂茄子(本名莨菪)を煎じ服用したるに間もなく非常に苦しみ出して人事不省となりしより家人は大に

打驚き必定腦充血なるべしと直に赤坂田町の岡崎醫師を迎へ診察を乞ひしに腦溢血の症狀はなく多分中毒ならんとて早速右の手當に及び取調べし處全く莨菪草の中毒と分りしより其筋へも報告し醫科大學より宮入、松島、三田三醫學士出張して症狀及び毒性の研究に從事し患者には十數回の注射療法を行ひしに二日夜より昨朝に掛け漸く人心地付きし由なるが同草は歐米にても喘息藥として烟草の中へ少量を切込て服用するものなれば多量に用ゆる時は前記の如き中毒を起す恐れあるものなりと注意す可きことにこそ（中央）

▲赤十字社の戰時計畫　日本赤十字社にては今回の戰役に對する準備計畫として當初病院船二隻と救護班七十七個を組織し病院船は開戰と殆んど同時に派遣し救護班も戰局の進むに從て漸次戰地及内地又は陸軍病院船へ派遣し盡したるを以て本部に於ては十二個支部をして臨時五個を編成せしめしも是亦派遣し盡したるを以て更に支部をして八班を編成せしの本社に於て二十五班を增備せり即ち臨時編成の分は本支部を通じて都合五十個にして之に當初準備の分七十七個を加ふれば總數百二十七個の多きに達せりと而して以上の救護團を一年間使用する費用は約三百萬圓（人員の養成其他の事務を除く）を要するが故に年々根基資本として蓄積すべき百十萬圓と前年度よりの繰越金八十萬圓とを流用して此經濟を維持する計畫なりと云ふ

▲樒と鮪の中毒　埼玉縣入間郡大井村大字花久保農三上平川郎（六十）は豫て精神病に罹り居たるが樒の葉を煎じて服用すれば全治するものと誤信し昨日附近の墓地より採り來りて多量に服したる爲治療の効なく死亡したりと又同縣比企郡高坂村大字宮鼻石井鐵次方にては去る三日婚禮の式ありて同村の松崎常吉（二十九）外七名招待されたるが招待されたる八人は何れも同夜激烈なる胃加答兒を起したるにぞ醫師を招ぎて診察を乞ひしに全く鮪の中毒なりし事判明したりと

▲ペスト發生　別項シールタ號ペスト發生するや内務省は時節柄大に警戒を要するより先づ陸上荷物の行先を調査し一々消毒することゝし關係府縣知事に内訓して日夜調査警戒せしめ居るが其荷物は左の如く散じ在り

▲ペスト關係の財物消毒法　警視廳にては英船ジェルダー號に於てルペスト關係貨物の消毒方法を左の如く定めたり

第一　綿莢は、包裝の儘蒸汽消毒に付すること
第二　米は約八時間以上日光に曝露し其の外皮たる袋は消却又は蒸汽消毒に作すること
第三　該毒物に觸接したりと認めたる物品は適宜消毒方法を施行すること
第四　該貨物を所載し又は所藏したる倉庫建物等には驅鼠消毒前淸潔前法を施行することへ但し驅鼠方法は可く硫黃薫蒸を行はしむる事
第五　以上消毒方法修了迄は倉庫及建物は封鎖すること
第六　該貨物を取扱ひたる人夫等に對し約十日間健康診斷を行ふこと
第七　第四號執行後該倉庫建物等には適宜の驅鼠方法を持續せしむること

▲ペスト初診者の頓死　去月三十一日門司に於てペスト患者の初診をなしたる米國醫師ニユーマン氏は去る六日廣島に來り同地旅館に於て死亡したるより其筋にては或は同病に感染せし爲めかと嚴重に取調をなしたるに同氏は平素多量の酒と催眠藥を濫用する爲め心臟衰弱し居るに死亡前に日本酒七合餘を頓服し泥醉の儘死したるにてペストに非ずと決定したりと

▲ベルツ博士の菜食論　醫學の泰斗として殊に我國民の體質に就て研究を遂げたベルツ博士は數年前よりして日本歩兵と歐洲最良の歩兵よりも優勝を占む可きことを確信し且つ其理由を菜食に歸したり博士の說に依れば肉食する人は窒素分過多なる爲め耐久力を有せず現に駈足又は登山等に就て日本人の疲勞せざるは菜食の賜なりと博士は北淸事變の際は自己の所信を確むる好時機とし仔細に觀察したるが歐洲兵は一として日本歩兵の耐久力に抵抗し得るものなかりしと云ふ又今回の日露交戰に際しても博士は日本歩兵の必ず露國歩兵よりも體質上より優勝なるべきを豫言し居たりと因に博士は赤城登山を試むるに際し數日間菜食して其耐久力を自驗したる事ありと云ふ此等は將來國民の研究す可き一點なる可しと

▲救護員勤務の成績　赤十字社に於て開戰以來今日迄に救護員を派遣したる總數は實に三千百十人の多數に達せしが其內病氣其他の事故左の如し

病氣其他事故者百九十二人（百分比例六人二分）
此内譯
死亡十五人（看護人長二、看護婦二、看護人九、輸送人二）
妊娠解任　廿九人（內看護婦長二）

病氣解任百四十四人（醫員三、調劑員四、書記四、看護婦長四、看護人長五、看護婦四十三、看護人七十二、輸送人十）
懲戒解任　四　人（看護婦一、看護人三）

▲臺灣ペストの減少　本年臺灣ペストは近年になき猖獗を極め四月千七百餘名五月二百二十餘名の患者を出したるも爾來冷氣加はるに從ひ著しく其數を減じ九月中に於ける同患者は僅に十六餘名にして昨今は只だ臺北地方に少數の患者を發生を見るのみなりと

▲女子と兒童の教育　女子は、細かな點に氣がつくから兒童を育てるには、至極適任のやうに思ふけれども、其實左樣でなささうです。兎角子供は、女の手にかけぬが一番よろしいらしい。殊に男の子は、其樣は思はれます。それて保姆を七八歳の男子につけるは、其子の身心を弱くさせ、面白からぬ性質を増長さする弊害があります。此點は學校と家庭との方で深く注意した方がよからうと存じます。一言で申しますと、男子は早くから躾の善い子供と一處に男手で育てるに限ります。（東京日々新聞）

▲消化性滋養劑　ヂゲストーゼ　近頃の發明新劑なる下山丹波兩博士のヂゲストーゼは消化作用を兼ぬる滋養劑にして宮内省伊勢侍醫の說述書によれば本劑は貴重なる本性を具へ有力なる諸成分を含有し殊に消化滋養の兩作用を兼備し第一に胃腸の官能を振起補助し新陳代謝の機能を圓滑にして身體諸器官の運營を旺盛ならしむと又長與博士の說に諸般の消化不良殊に抱水炭素化糖の作用減弱せるもの其他營養保持增進を必要とする慢性諸病に對する効驗顯著なり云々以て其の特効を知るべし價格は一圓五十錢七十五錢四十錢の三種あり

▲日本勝利の理由　日本軍の强さは食物にありといふ一新論を以て名高い、米國人ドクトル、シーマン少佐が、先月東京に於て演說せられた中、日本人勝利の理由として擧げられたもの左の通りである。

一、士官は一隊の父の如き事
一、日本人は平素酒を嗜まぬ事

一、糧食の質素に堪ふる事
一、地理に明かなること
一、戰地に於ける水の撰擇、開く所によれば日本軍は進軍前醫官を派して水を調査せしむと云ふ
一、男女間の道德堅固なる事
一、常に戰鬪の準備ありし事
尙ほ一層感ずべきは、米國に於ても、軍醫に將官相當官なく、何となく戰鬪員のみを尊ぶ風がある、然るに日本軍では軍醫に將官相當官あるは感ずべきことゝて、世界は之に傚はねばならぬ云々

▲マッキー夫人一行の出發に付拾遺　同夫人は去月十七日廣島出發廿一日乘船歸來の途に就かれしといふ同一行は五月一日以降今日迄の勤勞に對し去る十二日マッギー女史に勳六等寶冠章他の九人に勳七等寶冠章を授與せられたり尙赤十字社小澤副社長には廣島に出發し一同に對し紀念として銀製手函一個を贈呈し篤志看護婦人會よりは鍋島會長幹事大山夫人告別の爲め廣島に赴かれ純金製日米國旗交叉の胸飾用紀念ピン一個つゝ寄贈せしといふ
因に記す赤十字社にては同一行の爲め各別に金貳百圓宛を贈與せしに同一行は右金員を負傷病者に寄附を申出でたれば一行一同を特別社員に推薦せりと

▲看護婦の募集計畫　日本赤十字社にては當初より今日に至る迄養成せし全部三千餘名を召集して今や少しも剩さゞるに至りたるを以て今回應急の爲め養成の便法を設けんと目下審議中なりといふ

軍國婦人の活動

出征軍人家族慰問婦人會　同會は三月の交より創立せられ本會の役員濱尾及高木夫人は專務理事として引續き會務に鞅掌せられつゝあるが今其後の景況を聞くに賛助員百六十四名會員千六百八十八名にして會費月賦口數は二千六百六十二にして尙一時金の收入は八千百四十六圓五十六錢に達し七月末までも慰問濟戶數は總計七千五十四戶にして創立以來慰問濟

戸數の最も多きは淺草區にして千十八戸にして出征者ある毎に各區に於ける委員を其家を訪問して繃薬丹風呂敷手拭等何れも慰問の意を寓せる品々を送り又貧困者には相當の救助を爲すは勿論戰死負傷者あるときは一々之を訪ねて慰問せるが爲め出征軍人家族の何れも感謝を表しつゝありといふ

因に記仝慰問にては出征軍人家族自治の法を講せんが爲め今回小石川に一工場を設け麥稈細工の比較的練習の時日を要せず收得多きを發見し職業の撰擇供給の勞を取り其成績良好なるに於ては漸次各區に及ぼす計畫にして未熟の者にても一日十錢熟練せば一圓位を得らるべしといふ

▲婦人矯風會の慰問袋　戰地に於ける將卒間に極めて歡迎せらるゝ慰問袋は第一回の分は既に去月二十八日までに締切なり更に第二回蒐集に着手せり記者は過ぐる日會長矢島氏の二名の女史を隨て承認するを見たりしが又全會の大關和子女史も非常の熱情を罩めて毎朝書記一名と共に荷車四臺を用意し衛生課長の旗を押し立て一々寄贈者を訪ひつゝありといふ其豫定の袋數は約二万個なれば是を集むるも容易の業にあらずされば矯風會員も夫々手分して運動中なるが女史の如きも是れが爲め終日の步行に足痛みて堪へ難きも戰地に於ける仝胞の勞苦と篤志家の義送とを思へは毫も身の疲勞を覺へずとの氣焔にて熱心に盡力中なりといふ

▲篤志看護婦人會　誰れも知る如く篤志婦人の組織により病院にありては負傷者の看護に從事し後送患者のある度毎には懇ろに之を停車場に迎へて繃帶卷替へをなし又は其痛苦を慰め或は病床用の帽子を送り或は名刺入など送りて其懇切なること至れり盡せりといふ

▲各婦人の團體　靜岡にては將校夫人會なるもの設立せられ傷病兵士慰問を目的とし●愛國婦人會に於ける各支部に於ける團體は續々活動を初め●女子英學塾生徒は靴下腹卷等の恤兵品製作の事に携て記載せる處なるが尚慰問婦人會に問ひ合せ貧困者に衣

類を自から製作して寄贈することゝとなせるよしなるが原料買入費等は此事を聞き付け續々寄送するものありし●津田梅子女史及婦女新聞社にて發起の恤兵靴下献納のことは益々盛況にして鳩山夫人よりは金五十圓を寄附せられしと●日本橋の婦人會にても寄附袋を募集し去月三十一日〆切迄に九万餘個に達し出征地に一部を餘分を海軍に分送せりと●埼玉赤心會にては出征軍人のため防寒用胴卷を造り此價四百枚出來し輸送の手續を爲せりといふ●中山一位局より征出家族婦人慰問會へ金五十圓下賜ありたり●佐世保婦人會にても慰問袋を計畫し總數は八千六百餘に達したれば陸海軍へ夫々寄贈せりといふ



大日本婦人衛生會記事

十一月例會

本月五日午後一時半より神田區一ツ橋通女子職業學校に於て本會の例會を開く陸軍一等軍醫正醫學士能勢靜太君には戰地に於ける一般の觀察に付演說せられ下田歌子女史には戰時に於ける女子の體育と云へる演題にて體育と心育の密着なる關係を說き殊に時局に際しては益々女子體育の急務なる所以を詳述せられたり當日出席の役員は鳩山春子、鍋島本會々長、岡山とし子、三浦敎子、松平芳子、濱尾副會長、石川定子、田村きよ子、岡田德子、高木から子の諸氏(出席順)にして午後四時半頃散會せり

一本會は日露交を斷ちし以來出征家族慰問會に加はり本會役員の多くは是れが爲め鋭意盡力中なるが尚本會は素より掲げたる主意に基き今回本會資金中より金貳百圓を支出して日本赤十字社に寄附せしが同社より左の謝狀を寄せられたり

拜啓陳ば今般貴會より本會戰時事業費の內へ金貳百圓御附寄被成下會員一同貴會の御高誼を深く致感謝候此旨は早速本會總裁殿下の叡聞に達し候處御滿足に被思召候右之趣貴會會員御一同へ御序之節可然御傳致被成下度御禮旁此段得貴

意候敬具

明治三十七年十一月一日

日本赤十字社篤志看護婦人會々長
侯爵夫人　鍋島榮子
同　副會長
男爵夫人　千家俊子

大日本婦人衛生會々長
侯爵夫人　鍋島榮子殿
同副會長
濱尾作子殿

高崎支會報告

第二十六次例會

十月二日(日曜日)例會を高崎市立高等女學校に開く午後二時開會第一席産科婦人科專門醫藤崎清太郎君には「妊娠中の攝生」てふ演題にて妊娠及び産褥時に對する攝生法を懇篤に詳述し延いて普通婦人も平素産婆學及び看護學を修養すべき理由を述べられ第二席産科婦人科專門醫乾宗太郎君には「可憐婦人」と題し二十歳の某婦人處女膜閉塞症に數年間惱み治療の結果一般症狀輕快したる一例を報告して快活の辨を振はれたり時針器四時に至り爰に閉會を告ぐ

此日も會員の出席多數にして役員の出席者は左の諸氏なり

齋藤、秀島、相澤、島渡、星野、稲垣

茨城支會十月報告

十月卅日大日本婦人衛生會茨城支會の例會を開く會場は茨城縣女子師範學校内體操敎室に於てす其順序左の如し

一　傳染病に付て
本支會賛助員醫士　猿田浩太君

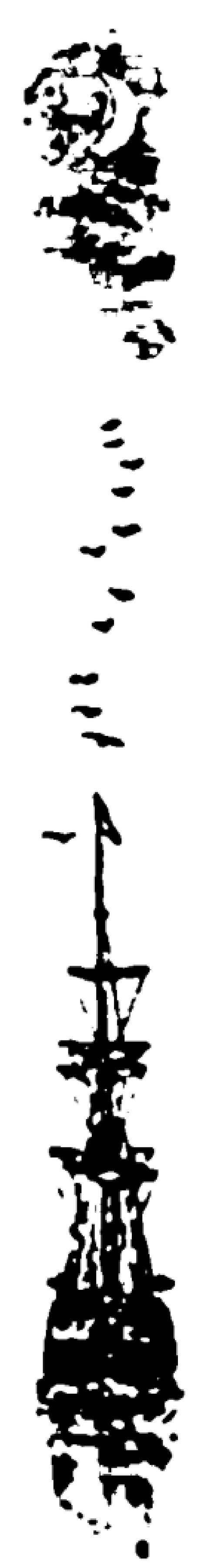
二　廢物利用に付て
茨城縣女子師範學校長　本田嘉鍾君

右閉後一時より二時四拾分に講話を終りて後懇話會に移り且恤兵のことに就て協議することありたり當日出席員一同は編もの紙布よりを爲しつゝ講話の聽聞を爲せり終りに校內生徒寄宿舍內を參觀し同三時卅分頃散會を告げぬ尙當日數名の入會者ありたり

宇都宮支會報告

●淺田講師の榮轉　宇都宮支會の講師なり顧問なりとして同會擴張の爲非常に斡旋の勞を取れし醫學士淺田狄君には今回山梨縣立病院長を命ぜられ赴任の途に就れたり夫人とみ子氏も又同會幹事として諸務を擔當せられ又廣く會員を勸誘せられし等同支會一同の深く感謝する處なりとされば今回の榮轉に際し聊か平素の勞を酬ひ重ねて氏の行を壯にせむが爲送別の宴を張らんとの內談もありしが時節柄故節約を主とし代ふるに他の方法を以て餞別の意を表し出發の當日は會員一同にて停車場迄見送りをなせしといふ

尙同會にては毛布募集の事を聞き取り敢へず會員一同より毛布九枚を募り恤兵部へ寄送せしといふ



●本會入會者

○事務所へ申込

●神田區南甲賀町八　通常會員　新井すみ子

●伊豫國松山市港町三ノ三十六　通常會員　高田直子

●鹿兒島縣川邊郡佐多村大泊　通常會員　大津ゆり子

●和歌山縣伊都郡橋本町大字東家　通常會員　千田柳子

●大和國添上郡帶解村大字池川第一番邸　通常會員　內藤多美子

●鹿兒島縣川邊郡高山村新富卅七　通常會員　村山八重子

○日本橋樋口八重子紹介

●芝區伊皿子町十七番地　通常會員　老沼花子

○三浦幹事紹介

●小石川區崎町十一　特別會員　飯島つる子

○赤坂浦原和歌子紹介

●麴町區永田町二ノ三十　通常會員　杉山歌子

○神戸山田まり子紹介

●神戸市北長狹通り三丁目四十一　通常會員　堤吉子

○高木幹事紹介

●芝區高輪南町　特別會員　毛利安子

○深川三森千枝子紹介

●京橋區築地二ノ二内保氏方　通常會員　松川多喜子

●新潟支會入會者

○廣川れん子紹介

●中蒲原郡須田村大字忠ノ森　通常會員　捧よい子

○和田幹事紹介

●新潟市西堀通八、高橋病院内　通常會員　西村みや子

●高崎支會入會者

○相川幹事紹介

●仝市宮元町百二十五　通常會員　大澤ふく子

●茨城支會入會者

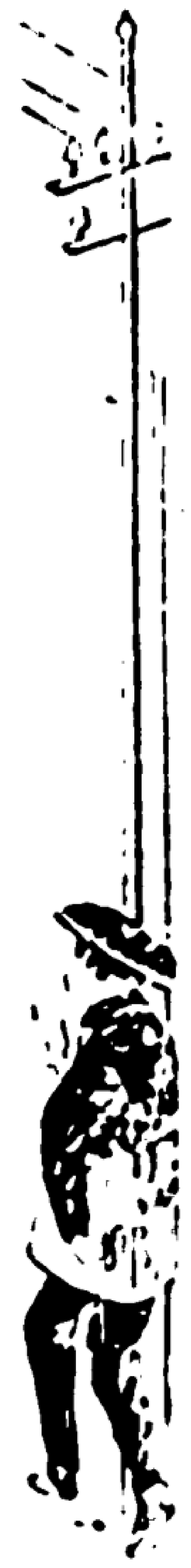
○寺原松子紹介

●茨城　通常會員　小橋文代子

●仝　通常會員　高西もと子

○湯知氏紹介

●茨城　通常會員　稲山とき子



●轉居

▲會員諸姉御轉居の際は可成新舊兩所御記入事務所宛御一報相願候

●本郷帝國醫院官舎へ　鵜飼芳子

●麹町區下二番町廿一、日本赤十字社四十四救護班宿舎へ　磯田ぶん子

●長野市裴科十九へ　有賀なゑ子

●麹町區下二番町四十六番地へ　土肥慶藏外

●仝所へ　土肥多越子

●本郷區追分町三十一、二號へ　湯地照子

●兵庫縣氷上郡柏原北町十八へ　衣近里子

●甲府市百石町六十九番戸へ　匂坂きく子

●牛込區市ケ谷富久町十六、島瀬氏方へ　中慈島代子

●京橋區南新堀町十一番地へ　天田つろ子

●千葉縣千葉郡登戸村遍山二九九へ　森いち子

●山口縣下關新町六丁目へ　土屋西子

●靜岡縣掛川町大手へ　室伏淸子

●麹町區三番町六十六、河合氏方へ　横矢ゆき子

●麹町區上二番町三十九へ　廣井つな子

●日本橋區元大坂町十一へ　村山すへ子

●京橋區新富町六ノ十一へ　富山幸子

●赤坂區青山南町五ノ四十五、にノ十二號へ　溝上幸子

●府下千駄ケ谷村徳川邸脇へ　三島ちか子

●淺草區千束町二ノ百二十八へ　及川かれ子

●四谷區仲町三丁目四十七番地へ　加藤雛子

●朝鮮國釜山四町二丁目一福亭前へ　淺海琴子

●奈良市東寺林町十八へ　磯田桜代子

●相州鎌倉長谷新宿へ　吉野仲子

●岩手縣盛岡市紙町七番戸盛岡病院　中山よしえ子

●交換寄贈雜誌（十月分）

●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　日本赤十字發行所

●統計集誌　京橋區山城町六　東京統計協會

●なゝな　麹町區下二番町二十七　大日本女學會

●大阪醫學會雜誌　大坂市東區淡路町一ノ六　大坂醫學會

●通俗衛生	大坂西區土佐堀通三ノ元	大坂私立衛生會
●大日本婦人教育會雜誌	赤坂區表町二ノ十三	大日本婦人教育會
●國家醫學會雜誌	本郷區富士町一	國家醫學會雜誌發行所
●婦人世界	大坂南區鹽町通四ノ七	浪華婦人會
●産科婦人科學雜誌	日本橋區濱町三ノ七	産科婦人科學會
●學校衛生	本郷區駒込西片町	學校衛生研究會
●婦女新聞	牛込區東五軒町四十一	婦女新聞社
●愛國婦人	麹町區飯田町一丁目	愛國婦人發行所
●藥石新報	大坂西區江戶堀下通三ノ三	藥石新報社
●工手の母	大坂北區西野田新家四ノ町	工手の母新聞社
●草樂新聞	大坂南區心齋橋筋三丁目	草樂新聞社
●日本衛生週報	甲府市佐渡町十五	日本衛生週報社
●家庭新聞	熊本市北新坪井町二三	家庭新聞社
●兒童教育	神田區末廣町十	兒童新聞社
●日本婦人	府下澁谷村字常磐松御料地內	帝國婦人協會
●衛生報知	神戶市相生町一ノ廿七	私立神戶市衛生會
●京濱實業新報	神田區北神保町八	京濱實業新聞社
●東京藥事新報	京橋區桶町四	東京藥事新報社
●東京教育雜誌	神田區錦町一ノ二十	東京教育雜誌發行所
●大日本私立衛生會雜誌	京橋區宗十郎町七	大日本私立衛生會
●婦人新報	赤坂區榎坂町五	婦人新報社
●産婆學雜誌	日本橋區濱町三ノ七	日本産婆學協會
●廣島衛生醫事月報	廣島市猫屋町	廣島衛生醫事月報社
●越佐教育雜誌	新潟市東仲通一番町	越佐教育雜誌社
●婦人と子とも	本郷區女子高等師範學校	フレーベル會
●神經學雜誌	小石川區駕籠町	日本神經學會
●新潟縣衛生會雜誌	新潟縣廳內	新潟縣衛生會
●婦人	神戶市三ノ宮町一丁目	婦人協會
●福田會月報	麻布區笄町百三	福田會育兒院
●牟婁新報	和歌山縣西牟婁郡田邊町	牟婁新報社

●書籍新報	日本橋區本銀町四丁目	帝都社
●佛教婦人	東京巣鴨	家庭社編輯部
●學校新聞	福井縣福井市毛矢町	學校新聞社
●家庭雜誌	麹町區六番町十	由分社
●藥業新報	福井市佐佳枝上町	藥業新報社
●新潟日報	新潟市西堀通三番町	新潟日報社
●藥業公論	豐多摩郡內藤新宿北裏町	藥業公論社
●東京市教育會雜誌	東京市役所內	東京市教育會
●日本女學生	本郷區東片町百三十三	日本女學生會
●日本衛生新聞	神田區錦町三丁目	日本衛生新聞社
●日本皮革時報	本所區表町五十七	益世社
●日本實業新報	武州入間郡川越町大字[illegible]鄕	日本實業新報社
●割烹新聞	下谷區上根岸町百十七	家庭割烹實習會
●家庭の友	本郷區西片町十	內外出版協會
●大日本山林會報	赤坂區溜池町一	大日本山林會事務所
●藥學雜誌	牛込區下宮比町八	日本藥學會
●躬行會叢誌	芝區三田綱町一	躬行會叢誌出版部
●洋服界	京橋南新堀二ノ一	南進社出版部



私立大日本婦人衛生會

茨城支會規則

開設の趣旨及目的　凡人生の幸福を保持するには完全なる教育を望まざる可からず之を望んとするには必ず衛生と相竢ちて而る後ち始めて全き事を得るならん。されば吾人は現今東京に於る該本部に限して更に茨城支會を開設し吾人が日常實行する衛生の事項を以て益研究し益改善を圖りて其の普及を互に努め力めんとするに在る而已●本會は私立大日本婦人衛生會茨城支會として之を當水戸市に設く●本支會々員たるを望む婦人は何人にても入會することを得●入會申込人の節は氏名及び住所等を明記し本支會事務所に申込むものとす。但し會員名は東京本部へ通知し然るのち之を交附すと雖とも徽章代は豫め前納せらるべし●會員種類會員を分ちて特別。通常。終身の三種とす終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三十錢以上通常會員は一ヶ月拾五錢を納むると●男子にして本支會の趣旨を賛成する者は之を賛成員とす●本支會員は本部にて毎月發刊する雜誌を無料にて受くることを得●退會せんとするものは其旨本支會事務所に報知すべし。死亡等は親戚知人より通知せらるべし）●本支會に左の役員を置く支會長一名、副支會長、幹事六名、評議員十名、書記、會計、庶務は幹事中より各二名づゝ互撰分擔す●役員は任期滿一ヶ年とし毎年五月總會に於て投票を以て之を定む●集會は例會總會評議員會及臨時會とす集會八月を除く外毎月一回第三の日曜日に之を開く總會は適宜の日を以て之を開く急要の件あるときは臨時會若くは評議員會を開きて評議する事あるべし●例會學識經驗ある知名の士に嘱托して衛生上の講義演説又は之に關したる實驗等をも爲し本支會員に聽講せしむ但會員は知人家族等誘引して參會することを得(此際出席の衣服は總て質素たるべし)●會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は會費を滞納するものある時は本支會長評議會の決議を經て除名する事あるべし●茲に記述したる數項の他その必要と認むべき事項あらば成る可く本部規則を適用するものとす

明治三十四年十月創立

水戸市上市田見小路二十五番地

茨城支會

私立大日本婦人衛生會

高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條　當支會は大日本婦人衛生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を増進するを目的とす●第二條　當支會は大日本婦人衛生會高崎支會と稱し事務所を高崎市寄合町五十番地に置く●第三條　當支會は高崎地方在住の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●第四條　本會又は支會の會員たらんとする者は住所姓名及び會員の種類を記し三個月分以上の會費を添へ申込まるべし●第五條　當支會に學術其の他の補益を與へらるゝ人士を推して講師又は篤志贊助員となす●第六條　當會員にして轉居死亡又は退會の時は速に其旨事務所に通報せらるべし●第七條　當支會に左の役員を置く會長一名副會長　名幹事六名評議員十二名●第八條　役員は會員中より公撰し會長副會長は役員中より互撰す、常事部評議員は役員中より會長之を指名す　但役員の任期を一箇年とし再撰するを得●第九條　本會の特別贊成員を定員外の評議員とす●第十條　當支會は毎月一回談話會を開き毎年一回總會を開く者とす總會に於ては談話の外役員の改撰會務の報告等をなす●第十一條　會員及贊成員の家族並に篤志贊成員は集會に參列するを得　但時宜により男子の參列は謝絶することあるべし●第十二條　本會々員は本會費の外別に支會費を要せず支會限りの會員は支會費として一箇月金五錢を出す者とす●第十三條　總て會費の徴收は集會の席上に於てするを例とす但三箇月分以上前納すべし●第十四條　支會の所有金は支會の名義を以て銀行に預け置くものとす●第十五條　會員又は會員外より金員物品の寄附ある時は之を受納す●第十六條　本會所有の金員物品を慈善事業等に使用せんとするときは衆議に諮るものとす●第十七條　會員は服裝其他を質素にて集會の節は時間等を確實に履行すべし●第十八條　特に此規則に掲げざる者は本會の規則を準用す

●事務所　高崎市寄合町五十番地

高崎支會

竹中成憲先生著書中素人諸君に適するもの

▲肺結核療法（總ての療法を集めあり） 貳圓四拾五錢
▲肺結核豫防法（豫防攝生の方法を示す） 參錢郵券拾八枚
▲産婆學（再版）（教授受驗の目的に適す） 同 參拾枚
▲ペスト（黒死病）（原因徴候及豫防法を示す） 同 九枚
▲肥滿の療法（ふとりたる人やせる法） 同 九枚
▲救急法（怪我急病の應急の手當） 同 拾貳枚
▲衛生寶典（内科諸病を一々説明す） 同 卅六枚

（皆郵税共）

東京市本郷區春木町貳丁目 半田屋
東京湯島天神町貳丁目卅六 鳳文堂
東京市神田區鍛冶町四番地 誠之堂

私立大日本婦人衛生會米澤支會規則

第一條 當會ハ私立大日本婦人衛生會米澤支會ト稱シ衛生上ノ研究ヲ目的トシ互ニ智識ヲ交換シ社會ノ幸福ヲ增進スルニアリ
第二條 支會事務所ハ當時假ニ當市免許町一三六九番地猪股方ニ置ク
第三條 當支會ニ會長一名副會長一名幹事五名ヲ置ク其任期ハ各一年トス
第四條 毎月一回（第二日曜午後一時ヨリ四時迄）談話會ヲ開キ毎年五月總會ヲナシ役員改撰庶務會計等ノ報告ヲナス
第五條 入會ハ會員ノ紹介ヲ經テ宿所姓名ニ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込又退會セントスル者ハ其旨事務所ニ屆出ヘシ
但シ已納ノ會費ハ返附セス
第六條 當支會ノ會費ハ左ノ三種トシテ特別會員毎月金參拾錢通常會員甲毎月金拾五錢乙毎月金五錢前納スルモノトス
但會費拾五錢以上納ムル者ニハ本會雜誌ヲ配附ス
第七條 會費ハ雜誌料トシテ本會ヘ納メ一部ハ支會經費ニ充テ殘餘ハ銀行ヘ貯蓄シテ支會事業ノ資金トナス
第八條 會員及會員外篤志者ヨリ金品ノ寄附アル時ハ役員協議ノ上特待員又ハ賛成員トナスヘシ
第九條 談話ノ節ハ汎ク婦人ノ傍聽ヲ許ス
第十條 支會々員ノ實業ヲ旨トシ集會ノ際ハ可成木綿服ヲ着用スルコ
第十一條 特ニ支會則ニ揭ケサルモノハ本部ノ會則ヲ準用ス

事務所米澤市免許町一三六九

米澤支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章

第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢

●第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章

第一號　七十錢（黑塗箱入送費九錢）　六十錢（桐箱入送費六錢）

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なりとも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麴町飯田橋通）宛振出あるべし又た價格表記通運便、何にても差支なし●會費受領證を要する節は送費として郵劵一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈の事

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

本誌一部定價貳拾錢

東京市麴町區飯田町六丁目三番地
發行所　私立大日本婦人衛生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行人　田中德三郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　渡邊智

明治三十七年十一月廿三日印刷及發行（毎月一回二十日發行）
婦人衛生雜誌　第百八拾號

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場印刷